

實業讀本



私立
關西工商學校編



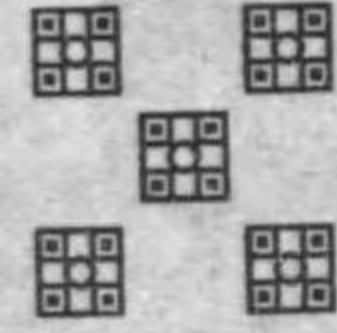
始



本



實



立 私

編 校 學 工 商 西 關



序

我關西商工學校工業豫科は其目的と教程何れも一種特別のものにて各専門科の根柢たるべき共通學科を一ケ年にて修了せしむるに在れば従つて是に用ふる處の教科書の如きも特殊の要求ありて普通坊間に發賣せるものにては此所要を充すに不適當なり故に多年の經驗に鑑み本校自ら適當なる諸種の教科書を編纂し之を印刷して生徒に頒つことゝなしたり

本書の編修に就ては我校講師稻岡熊二郎富永實達兩氏の盡力に負ふ處多大なり因て茲に之を誌して感謝の意を表す

大正五年仲春

名譽校長 工學博士 平 賀 義 美

識す

實業讀本

目次

- 一 天壤無窮の皇室
- 二 日本の民族
- 三 統治の大權
- 四 臣民の權利義務
- 五 國勢の發展
- 六 甲板上の君が代
- 七 商業
- 八 商業上より觀たる日本の地勢
- 九 英國
- 一〇 石炭
- 一一 西比利亞鐵道

一 三 五 七 八 二 四 一 二 四 七

一二	ジョルジステイブソン	三〇
一三	修業論	三四
一四	苗代	三六
一五	感味すべき俳句	三七
一六	田園趣味	四〇
一七	伯林通信	四二
一八	獨逸留學中の所感	四五
一九	虚業家	四九
二〇	奢侈論	五五
二一	貯蓄論	五九
二二	十錢銀貨の來歴談	五九
二三	人事難しと覺悟すべし	六五
二四	渡舟	六九
二五	澁澤榮一	七一
二六	事業の人	七三
二七	偉人	七七

二八	格言四則	七八
二九	矢野二郎翁と一青年	七八
三〇	勉強 その一	八一
三一	勉強 その二	八五
三二	鴛鴦學音 (漢文)	八七
三三	格言四則	八八
三四	學問の功	八八
三五	學問の要	八九
三六	人は萬物の靈長	九〇
三七	源義家 (漢文)	九二
三八	近郊の秋色	九二
三九	夜の村	九五
四〇	採用試験	九六
四一	銀行に入りし少年に	一〇一
四二	富貴	一〇四
四三	眞の勇者	一〇五

四四	題蘭相如奉壁圖 (漢文)	一〇九
四五	閔損單衣 (漢文)	一一〇
四六	醜女說 (漢文)	一一〇
	○揚子雲	
	○孔子	
四七	獨立心	一一一
四八	カーネギー (一)	一一三
四九	カーネギー (二)	一一六
五〇	輸出品の荷造につき注意を與ふ	一一九
五一	新製漆器を観る記	一二〇
五二	工人及び商人	一二四
五三	協同一致	一二八
五四	自治の精神	一二九
五五	山の美	一三四
五六	翡翠	一三六
五七	相摸灘の落日	一三七

五八	軍艦の種類及任務	一四〇
五九	樺山中將膽略 (漢文)	一四四
	○遜思邈	
六〇	征人の涙	一四五
六一	剛者亦泣 (漢文)	一四六
六二	本多氏絶命詞 (漢文)	一四七
六三	義 丐 (漢文)	一四八
六四	揚震四知 (漢文)	一四八
六五	蘧伯玉 (漢文)	一四九
六六	毀譽	一四九
六七	蟬の引	一五四
六八	貴と賤との損益	一五四
	○表了凡	
	○又曰 ○識量大	
六九	自信	一五五
七〇	エヂソン	一五六

七一 飯田覺兵衛 (漢文) 一五九
 七二 一生四十八戰 (漢文) 一六〇
 七三 需要と供給 一六一
 七四 山本勘助の明眼 一六四
 七五 禮儀 一六五
 七六 近江聖人 (漢文) 一七〇
 七七 君子有五樂 (漢文) 一七一
 七八 繪を見て心を改む 一七二
 七九 心有主 (漢文) 一七八
 八〇 生涯の終とせよ 一七八
 八一 梶川彌三郎 (漢文) 一八五
 八二 勇將琵琶に泣く 一八六
 八三 米田某 (漢文) 一八九
 八四 遠州蓋説 (漢文) 一八九
 八五 南洲遺訓 一九〇
 八六 曾我兄弟と大石主税 一九二

八七 烈士喜劔の碑文 一九六
 八八 前兵兒謠 (漢文) 二〇〇
 八九 高德題櫻樹 (漢文) 二〇一
 九〇 題高德書櫻樹圖 (漢文) 二〇一
 九一 藝侯戒諸子 (漢文) 二〇二
 九二 不弟を誠む 二〇二
 九三 泉仲愛 (漢文) 二〇三
 ○ 煮豆
 九四 成瀬奇獄 (漢文) 二〇四
 九五 重宗聽訟 (漢文) 二〇五
 九六 松野驅を論ず 二〇六
 九七 太田忠兵衛 (漢文) 二〇八
 九八 林述齋 (漢文) 二〇九
 九九 諭言三則 二〇九
 一〇〇 貝原益軒 (漢文) 二一一
 一〇一 蝦蟇威節婦 (漢文) 二一一

一〇二	德政	二二二
一〇三	天野三郎兵衛	二二五
一〇四	春夫某の義勇	二二八
一〇五	清正重命 (漢文)	二二九
一〇六	細川藤孝 (漢文)	二三〇
一〇七	太田道灌	二三一
一〇八	格言四則	二二三
一〇九	菅茶山 (漢文)	二二三
一一〇	師德戒弟 (漢文)	二二四
一一一	分別なき者におちよ	二二四
一一二	滄浪の水	二二五
一一三	貝をおほふ人	二二六
一一四	弓射るにもろ矢	二二八
一一五	格言三則	二二九

實業讀本目次 (畢)

實業讀本

一 天壤無窮の皇室 大隈重信

神代よりうけし寶をまもりにて
をさめ來にけり日の本つ國

御製
大日本は神國なり、神種の天皇長へに之を統治し、國體の美
なる、宇内に其の比なし。

皇室は大日本の中心なり、神代このかた、文明の源を成せ
り、皇室は億兆の宗家にして、天子は公民の父母にましま
す。

我が國は皇祖肇國の古より、列聖相承け、仁愛の政を行ひ、祖
宗を祀り、赤子を安んじたまへり、仁徳天皇は『君は民を

統治
一



比の國體を發揮したり、
日本民族は自然を愛し、平和を喜び、清潔を好み、勇敢にして
溫雅、快活にして廉直なり、仁恕にして残忍ならず、恬淡に
して偏執するところなし、然れども、また進んで危を冒し、
難に耐ふるの性を有す、

日本民族は進取を尙び、知識を希ひ、同化の力に富む、他の
文明に觸るゝや、直ちに其の長を攝取して、自國の發展に資
す、古くは支那、印度、近くは西洋の文明を輸入し、之を用ひ
て政治を改め、文教を興し、風俗を移せり、宗教に於ては、概
ね信仰を束縛せず、異宗の紛争によりて、國家の危害を招き
たることなし、佛教は神道と相共に行はれ、基督教もまた
漸く行はれて、國風の同化を受くるに至れり、
此のごときは、即ち我が國民性の致すところなり、世界に

卓絶せる國體を保ち、上下三千年の國家を繼ぎて、こゝに新
運を開き、列國と對峙するに至れること、誠に故あるかな、
(國民讀本)

三 統治の大權

大隈重信

御製
あかつきのねざめしづかに思ふかな
わがまつりごといかがあらむご

帝國憲法は、七章、七十六條より成り、天皇統治の大權と、臣民
の權利義務とを其の二大綱領とす、天皇統治の大權は、憲
法の首條に於て之を明記す、

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス
是れ固より天祖の神勅なり、また我が國體の本義なり、雖
も、なほ之を法文に録して、臣民に示したまへるものなり、

天皇は神聖にして侵すべからず。天皇は國の元首にして、統治權を總攬し、憲法の條規に由りて之を行ふ。天皇は帝國議會の協賛を以て立法權を行ひ、而して、法律を裁可し、其の公布及び執行を命ず。

天皇は法律を執行するため、また公共の安全を保持し、その災厄を避け、臣民の幸福を増進するために、必要なる命令を發す。天皇は文武の官制を定め、官吏の任免を行ひ、陸海軍を統帥し、戰を宣し、和を講じ、條約を締結し、戒嚴を宣告す。

天皇は爵位、勳章等を授與し、大赦、特赦、減刑及び復權を命ず。皇位は皇室典範の定むる所により、祖宗の皇統にして男系の男子これを繼承す。天皇崩ずるときは、皇嗣即ち踐祚して、祖宗の神器を承く。これ、皇位は一日も曠しくすべからざるを以てなり。天皇未だ成年に達せざるか、若くは故障

久しきに亘り、大政を親らする能はざるときは、攝政を置き皇族これに任じ、天皇の名に於て大權を行ふ。(國民讀本)

四 臣民の權利義務

大隈重信

御製
ここなくて治まる世にも民のため

わもふこころはやすむさきなし

日本臣民たるの要件は、法律の定むるところによるものごとす。日本臣民は、法律、命令の定むる所の資格に應じて、均しく文武官に任ぜられ、また他の公務に就くことを得べし。

日本臣民は、其の所有權を保障せられ、法律の範圍内に於て、居住、移轉、言論、著作、印行、集會、結社の自由を有し、安寧秩序を妨げず、臣民の義務に背かざる限に於て、信教の自由を有す。日本臣民は、法律に由るにあらずして、信書の秘密を侵され、

逮捕監禁、審問、處罰を受け、また住所の侵入、搜索を被る等の
ことなく、法律の定めたる裁判官の裁判を受くるの權を奪
はるゝことなし。また相當の敬禮を守り、規程に従ひて請
願するの權あり。

日本臣民は、法律の定むる所に由り、兵役及び納税の義務を
有す。凡そ臣民の權利は、戰時又は國家の事變に際し、天皇
大權の施行を妨ぐるることなし。(國民讀本)

五 國勢の發展

大隈重信

うけつぎし國の柱のうごきなく

御製

さかぬゆく世をなほいのるかな

我が國は、明治のはじめ、北海道を拓き、琉球を收め、後二回の
戰役によりて、臺灣、樺太を領有し、尋いで韓國を併合して、版

圖はますます擴大し、人口また封建の世に倍加せり。臺灣
は、嘗て西班牙人、和蘭人これを占有し、呼ぶに美島みしまの名を以
てし、後久しく支那に屬したりき。我が國人の、これと交通
を始めしは、蓋し豊臣氏の頃にあり、稱して高砂島といへり、
明治二十八年、清國の讓與に由りて、帝國の領土となる。乃
ち總督府を立て、軍隊、警察を置きて、安寧秩序を保ち、裁判所
を設けて、人民の權利を護り、また學校を興して、文化の普及
を務め、交通を開きて、産業の發達を圖りしかば、新附の民は
ますます皇澤に浴して、其の業に安んじ、内地より移住する
ものもまた多く、天與の富源は年を逐うて大いに開けたり。
樺太は、もと邦人の發見に係り、夙に我が國の有なりしが、曩
に露國との境界を定むるにあたり、千島と交換する名義の
下に、一時露國に屬したり。然るに、明治三十七八年戰役の

結果、露國は樺太の南半を分割し、關東州の租借權、他の特權を併せて、我に讓與せり。是に於て、政府は樺太に地方廳を設け、森林、漁業、鑛山等の利を興し、また關東州に都督府を置きて、諸政を統べしめ、南滿洲鐵道會社に特權を與へて、鐵道、港灣、鑛山等の經營に従事せしむ。韓國は、上古より我が國の外藩として、久しく朝貢の禮を執りし。雖も、中世に及び離畔して、支那に屬したり。然るに、豐臣氏に至り、其の征討するところとなり、徳川氏に及びて、新に我と好を修め、將軍の襲職するところに、來聘使を遣りて、之を慶賀したり。維新の後、韓國が舊交を繼ぐことを拒みたるがため、征韓の議、朝野に紛起せし。雖も、政府は平和を旨として、之と修好條約を訂し、以て其の獨立國たることを承認せり。外交の

頻繁なるに隨ひ、日韓兩國の關係は、いよいよ密接となり、韓國を保全するは、則ち我が國の存立を鞏固にし、また東洋の平和を保障する所以となり。ゆゑに我が國は之に臨むに恩威を以てし、弊政を革め、治績を擧げて、獨立國の名實を全うせしめん。然るに韓國は反覆常なくして、東洋の禍源を醸し、遂に二回の大役を招きたり。是より韓國は我が保護國となりし。雖も、累代積弱の致すところ、自ら内外多端の政務に處して、革新の功を奏する能はず。よりにて明治四十三年八月、韓國皇帝は一切の統治權を擧げて、完全に且つ永久に日本國皇帝に讓與せり。是に於て、日本は韓國を併合して、其の地を朝鮮と改稱し、總督府を置きて、政務、軍務を總べしめ、其の王家、貴族に殊遇を賜ひ、人民をして新政の恩澤に浴し、泰平の福利を享けしむるに

至れり、

國土の膨脹に伴ひて、國民また須らく新疆の開拓に力を致すべし。臺灣、樺太、朝鮮、何れの地か生産に可ならざる。宜しく之に移住して、産業を勤め、以て國勢の發展を圖るべきなり。(國民讀本)

六 甲板上の君が代

芳賀 矢一

一人の農夫、布哇に出稼せむとて、横濱出帆の外國船に搭せり。船は東へ東へ進む事已に七日、見渡すかぎり渺茫として、故郷に見慣れし青田もなく、麥島も見えず。曉方に鶏も歌はず、夕暮に鴉もなかず。日は海より出でて海に入り、はてなき蒼空、はてなき海原、『板子一枚下は地獄』この諺もたもひ出されて、唯何となく物恐し。

あゝ、今頃は村の人々も打寄りて、我が事を噂し居るならむ。今は畑打ちつかれて、茶飲時ならむなご想ひ出づれば、故郷の有様ありく。ご目の前に見ゆて、悲しさいふばかりなし。過去の樂しかりしにつけても、前途の心配は一方ならず、涙ははらはらと流れ出で、甲板の上を右へ左へ歩みて、ひこり物思に沈み居たり。

折しも甲板の一隅に、『君が代は千代に八千代に』と歌ふ聲聞ゆ。萬里の孤客この歌を聽きて、さながら電氣にうたれたるが如く、『さては、余より外に、日本人のこの船にも在るか』と、飛び立つばかりうれしく、聲する方に歩み行けば、一人の青年、これも米國に行かむとて、此の船に乗り込みたるが、同じく懷郷の念に堪へかねて、この歌を歌ひたるなり。二人の喜は譬へむに物なく、終日懇に語り合ひて、互に前途

の希望を話し、喜び勇みて、各々目的地に達したりといふ。

七 商 業

天照大神の後に、彦火々出見尊と云ふ神あり、尊は山の幸
 ごと、獵を好み給ひ、御兄火蘭降尊は、海の幸ごと、漁を得意と
 し給ひき、或日、二柱の神は、試に之を易へ行は、興深から
 むごと、各々自ら造り給ひし弓箭と釣鈎とを換へ給ひしが、
 御兄は山に入りて獵し給ひしも獲物なく、歸りて弓箭を還
 し給ふ、御弟の尊は海にて釣鈎を失ひ給ひしかば、自ら新
 に造りて償はむとし給ひしに、御兄の尊は、『必ず原の釣鈎
 を』と責め給ふ、尊大に之を憂ひ、海濱を徊ひ給ひし折柄、
 鹽土の翁に遇ひ、實情を告げ給ひしに、乃ち翁は無目籠を造
 りて尊を盛れ、溟中に沈めて龍宮に送りまつる、こゝに海

釣鈎釣鈎

赤女は鯛の古名

簡易 容易 貿易 變易

器用 巧意 得意

神は大小の魚を集め、赤女の魚より釣鈎を得て之を還し、尙
 多くの寶を興へて送りまゐらしけり。これぞ我が邦に
 於ける交換の初なること云ひ傳ふ。
 太古にありては、其の生活極めて簡易にして、物を欲するが
 まにまに河川に漁り、また器具なども、自らひまにまかせて
 造り用ひたり、これを自足經濟時代といふ、されど、人に
 は各々特長あり、家を建つるに巧なるもの、器具を造るに器
 用なる人、漁獵に得意のものあり、また住む所によりて、手に
 入れ易きもの異なるがため、自分の多く所有せるもの、また
 は容易く得らるゝもの、他人の持つもの、または得難きも
 の、取り換へを初むるに至れり、これを物々交換と稱す、
 その後時移り人増し、他の部落又は村々との往來盛となる
 に従ひ、交換は次第々々に頻繁となり、所謂、有無相通じて、各

々利益と幸福を増すに至れり。されど、物と物との直接の交換は、私の望む品を有する人が、我が持てる物を欲せざることあり、或は、物によりては望み通りに分ち得ざることなごありて、様々の不便を感じり。この不便を除かんが爲め、交換の媒介物として貨幣を發明せり。これによりて、各人は交換の相手を求むるの煩勞なく、各々安心して其特長に向つて己の技を勵むに至り、分業助長せられ、遂には、交換の媒介調和を專業とする商人を生ずるに至れり。即ち、商人は、物を産出する人との消費する人との間に立ちて、之が交換を事業とするが故に、生産者は其の生産物を容易く商人に賣り渡し、また何物にても其の欲する物を求むるを得、かつ又、商人より如何なる物が最もよく需要せらるゝかを聞き、益々生産を有効ならしむるを得るなり。

かくて、貨幣の使用盛となり、商業發達するに従ひ、一々多額の金錢を勘定して授受することの面倒と不便を避けんがため、手形と稱する證書を現金の代用とし、或る一定の時に代金の授受をなす約束をなす、所謂信用取引行はれ、商業は非常の發達をなすに至れり。さてまた商業の行はるゝ場所も、初めには、一部落一村一町一地方に限られたれど、遂には、今日の如く一國全世界に涉りて取引をなすに至れり、これを國際貿易と云ふ。

八 商業上より觀たる日本の地勢

我が日本、天然の地勢は、世界の商業上、まことに、良好なる位置を占むるものなりといふべし。四面、皆、繞らすに海を以てし、西方には一葦帶水を隔て、支那の大國あり、東方には

場

膏腴
膏腴
瘦

又、太平洋を隔て、南北亞米利加の大陸あり、共に我が輸出貿易の最大顧客たり。南には、近來、新に開けたる濠洲をはじめ、そして、南洋無數の諸島あり、北には、又、廣漠無涯の露西亞帝國あり、共に以て我が將來の好顧客となすに堪へたり。ここに、目下、著手中なる西比利亞鐵道、ニカラガ運河の二大工事、竣工せば、歐洲との交通は、海に、陸に、その直接の通路を開かれ得べきにあらずや。かくの如くにして、我が國は實に東洋貿易の中心市場たるべき、無上の好位置を占むるものなりといふべし。

我が國は、また、その地味膏腴にして、頗、天産物に富み、全國到處として農産物を出さざるはなし。また北海道には、幌内、夕張等の炭山あり、九州には高島、田川等の炭坑ありて、皆良種の石炭を産す。その他佐渡、生野、足尾、別子等の鑛山よ

多饒
饒

りは、盛に、金、銀、銅、鐵等の諸鑛物を産し、北越地方よりは、また石油を出し、南海は、多く食鹽を産出す。且、木曾、天城、熊野等の諸山は、森林鬱蒼として良材に富み、ここに四面の環海に至りては、その漁獵の利、まことに無盡藏なり。我が日本、天然の地勢は、かくの如く良好に、その天産物は、また、かくの如く饒多なり。これを、かの、世界第一の商業國たる英國に比するも決して遜色あるを見ず。かれ、石炭と鐵とに富めば、我も石炭と穀物とに富み、かれに歐羅巴大陸を控ふる利あれば、我には亞細亞大陸を控ふる利あり。かれ、大西洋を横ぎりて、亞米利加に通ずれば、我もまた太平洋を横ぎりて、亞米利加に通ずべし。その南、南洋諸島に臨み、北に、西比利亞を控ふるに至りては、我むしろ彼れに比して、更に、一段の好位置にありといはざるべからず。

才幹
幹事
奮旋
奮舊

兩國の位置、天産かくの如く相如けり。しかも一たびその貿易の多寡を比較するに及びて、我等は實にその差異のあまりに、甚しきに驚かずばならず。西曆千九百年に於ける、英國の輸出入額は、合計八億七千八百拾八萬四千〇八拾磅にして、これを同年度、即、我が明治三十三年に於ける、輸出入額、合計四億九千壹百六拾九萬壹千八百四拾圓に比すれば、殆、拾七倍以上の多額を示せり。これ、豈驚くべき差異にあらずや。嗚呼、その位置と、天産物と、ほぼ、相等しく、しかも、その貿易額は、かくの如き非常なる差異を生ぜるもの、そも、何の故ぞ、他なし、我が國人の貿易上の智識、經驗、共にかれに及ばずして、その勇氣、才幹、また、かれに劣りたるが爲のみ。我が國人たるもの、よろしく奮勵するところなかるべからざるなり。(日本實業讀本)

九 英 國

箴言
箴言

『海を支配せよ。そは汝の所有に屬すべきものぞ』こは、英國の國歌の、常に、その國民に教ふるところの箴言なり。まここに、彼等はよくこの箴言を守りたりき。かくて、その祖國をば疑ひもなき、世界の一大強國となしぬ。英の本國は、まここに、眇たる一小島國に過ぎず。されど、その領地は、今や、五大洲のすべての部分にわたりて、實に二千萬方里の廣袤を數へ、その住民は、また三億七千萬人の多きを數ふるに至れり。いかなる港灣にも、英國の國旗を掲げたる船舶の至らざる所なく、また、いかなる市街にも、英國商品の陳列せられざる所はなし。かくて、その國語は大西、大平、印度の三大洋にわたりて、その港、すべての都市に向ひて、

その傳播の力を振ひ、遂に、世界の通用語たる位置を占めむ
 ごとしつつあるを見ば、何人か、また、英國の勢力の至大なるに
 驚歎せざるものあらむや、しかして、その、こゝに至れる一
 大原因は、その國民のまここに、よく、海洋を支配したるにあ
 り、

英國國民は、よく海洋を支配して、これを利用するここをつま
 めたると共に、また、國內の工業につきて、須臾も、その注意を
 怠らざりき、かくて、この二大注意は、互に、相依り、相助けて、
 以て、そこに、その偉大なる効果を現出したるなり、それ、一
 國の天産物は、たのづから限りあり、今、間斷なき勞働によ
 りて、限なき産業を營まむとせば、勢、その原料を他國より、齎
 し來たらざるべからず、また、國內の壯丁も、その數、自ら限
 あり、こゝに於てか、精巧なる器械によりて、つとめて人の

勞力を省くここを、はからざるべからず、しかして、この兩
 面の注意は、英國國民の最も心を用ひて、巧に行ひし所のもの
 なり、かれ等は、先づ海洋を支配し、その進歩したる航海の
 術によりて、その多數の船舶を世界の各港灣に送りて、もろ
 く、の原料品を、本國に齎し來らしめ、かくて、そこに卓絶し
 たる工藝の術によりて、直に、これを精製し、再、その船舶によ
 りて、これを各國の市場に出せり、かくの如くにして、英國
 は、世界第一の海國たる名譽を博し得たると共に、また、世界
 第一の工業國たり、商業國たる絶大の名譽をも、博するここ
 を得たるなり、

英國の工業を盛ならしめたる原因につきて、特に二つの大
 なるものあり、一を石炭の應用となし、二を蒸氣機關の發
 明とす、英國は、最も良好なる石炭に富み、今日にては年

々その採掘の量、實に二億五千萬噸の多きに達せりといふ、かくて、その中、海外に輸出せらるゝものは、僅に、その十分の一に過ぎずして、その他は悉く、國內の各工場にて、消費せらるゝものなりといふに至りては、實に驚くべきここにあらずや、その今日の富強を致せる所以のもの、決して偶然にあらずといふべし。(マルシャル世界地理學抄譯)

一〇 石 炭

石炭は鐵と相ならびて、現代にたける最も重要なる礦物にして、その産出如何は、直に以てその國の盛衰に影響す、と稱せらる。現に、英米二國が今日の繁榮を來たせるは、その石炭の産出潤澤なるに負ふこと頗る大なりといはるゝにあらずや。

進化論によれば、現今地球上に繁茂する高等なる植物、即ちかの顯花植物の類も、そのはじめは菌類、もしくは苔類の如き下等植物にして、それより羊齒類の如きものとなり、更に蘇鐵、公孫樹の如きものに變じ、かくて、遂に松杉となり、更に高等なる今日のさまに進みたるものにして、往古にありては、隱花植物ひとり地球の全面をわがもの顔に繁茂したりしなりとぞ。

その當時、地球の氣候は、現今の熱帶地方よりもあつく、且つ、空氣中には、多量の水蒸氣と炭酸瓦斯とを含みて、植物の生育には、この上もなき狀況なりしかば、その隱花植物なるものは皆驚くべき發育を遂げ、殆どわれらの想像すること能はざるばかりなる巨大のものとなり、そこに數百千里の大森林をなしたるが如し。その後、大地變の爲に、この大森林

は到る處水底に没し去りて、爾來數千萬年の間そのまゝに埋没せられたるが、上よりは、廣大なる地層の壓力を受け、下よりは、絶えまなき地熱の影響を受け、かくて、遂に今日われらが見るところの石炭はなれるなり。

この時代は、地質學者の呼んで石炭時代といふところのものにして、歐米地方の石炭はたもにこの時代になれるものなり、しかるに、わが國はその時代には深く海底に没して、これら植物の生育に適する陸面なかりしが故に、この時代になれる石炭の産出は絶えてあることなし、わが九州及び北海道より産出するものは、これよりはよほご新しく、地質學上にはゆる第三紀の時代に繁茂したる植物より變形して成れるものなり。

一 西比利亞鐵道 (高勇にある)

歐羅巴に向ひて、大連を發せるは六月二十日の午後一時なり、翌朝午前六時長春に著し、是より露國の東清鐵道に轉乘し、哈爾濱ハルビンに著きて、モスコウ行の客車に移る、客車は、すべてボギー貫通式にして、車輻また大なり、一等には各室に、二等には車輛の兩端に洗面所あり、又別に、食堂車、貨車あり、食堂車は圖書室を兼ね、貨車には浴場の設ありて、隨時旅客の需に應ず、哈爾濱よりマンヂユリヤに至る間は、支那國の版圖にして、軌道の左右、清國人が樹下、石上に煙を吹きて、過ぎ行く汽車を目送し、空飛ぶ雲を眺むるを見る、美しきは平野満目の草花なり、驛毎に谷百合、忘れな草、櫻草等の花束を賣る。

マンヂュリヤ以西はすべて露領に屬す、河流に沿うて牧場多く、テントを張りて生活する土民を見る、間々赤く青く塗立てたる木造の家屋あり、尖塔ありて、金色の十字架の高くかまやけるは寺院にやあらむ、二十四日の早朝、タシホイ驛に着して、バイカル湖の青波を望むを得たり、湖邊の連山は、處まだらに雪を残し、湖水また雪を漂はす、汽車は湖に沿うて迂回す、かつて、汽船によりて横斷したりしが、日露戦役中、露國が多額の資を投じて、山を掘り岩を穿ちて、此の迂回線を通じたるなりといふ、

バイカルを後にして、間もなく西比利亞第一の都會イルクツクに著く、マンヂュリヤより此の驛までをザバイカル鐵道といふ、西比利亞鐵道とは、是より西ウラル山下までの稱なり、此の附近、亦牧場多し、之を過ぐれば、汽車は全

く花の夏野に入れり、目なれぬ草の中に、我等が庭園に栽培する芍薬の多く野生せるを見る、點々たる農家の側に、竿を立て、其の頂に郵便函の如きものを載せたるあり、同乗の人に問へば、小鳥に巢を與ふるものなりとは、露人も亦やさしき心あるにあらずや、

西するに隨ひて、驛毎に移住民の群を見ること多し、西比利亞は我國に二十倍の面積ありて、住民は我が凡そ十分の一にも過ぎず、所謂『十里蒼茫人煙を見ず』の境少からざれば、露國政府は乗車賃を輕減し、耕地を與へ、農具を貸與して、盛に移住を奨励せり、

エニセイ・オビ二大河の上流地方は、一望無限の草野なり、土地また肥沃にして、麥類の栽培に適するを以て、西比利亞の穀倉と稱せらる、然れども住民未だ多からず、數里にし

て一部落を見、數十里にして一市街を見るのみ、
 トム河畔の大都會トムスクの南を過ぎて、二十八日の午後、
 オムスクに著く、此のあたりも亦一面の草野にして、丈長
 き尾花の風に波立つを見る、やがて、西比利亞鐵道の終點
 チェリヤビンスクに著きて、汽車はウラル山中に入れり、
 時に、奇峯の遠く聳ゆるを見る、ここあれども、殆ど曠野を行
 く之感ありて、身の大山脈中にあるを覺えず、いつしか汽
 車は此の大山脈を越えて、歐羅巴の地に入れり、今日は七
 月二日にして、露曆の六月十九日なり、是より、一晝夜にし
 てモスコーに著かむとす。

二二 ジオルジ、ステイブソン

ステイブソンは、ニッカーカッスルのウイラムなる石炭坑

の蒸汽機關の火夫の子なり、八歳の時、既に父を扶けて牧
 童となり、後、日給一志シリングを得て、鑛夫となり、汲水ポンプの掛こ
 なれり、
 その業務の暇ごとに、彼は絶えず粘土を以てさまざまの機
 械を模造するを唯一の娛たのしみとなしたるが、その餘りに巧なる
 を見て、一技師は頻りに彼を賞揚し、『汝は器械製造業に就
 くこそよけれ』とて、ワットが新發明の蒸汽機關のここを
 は精しく説明したるに、彼は熱心にそれを聽き、『いかにせ
 ばそれらの事を知り得べきか』と問へり、『そを知るべき
 書籍は多し』とて、さまざまの書籍を出して彼に示しぬ、
 彼の眼は輝けり、やがて涙を以て曇れり、悲哉、彼の眼には
 一丁字もなかりしなり、彼は、こゝにはじめてわが無學を
 覺りぬ。

彼は志を決して夜學に入學し、隔夜に通學して讀書と習字を學び、ついで數學をも學べり。殊にその應用問題につきては興味を持ち、専心これが解釋に力めたりきこそぞ。その心懸、世の常の人の如くならざりしかば、まもなく一機關の長となりて、収入もやゝ増加し、今は若干の貯蓄も出來て一家をなし、かくて一子ロベルト生れぬ。歲月は夢の如く過ぎ行きて、彼は機關長をも兼ね、一子ロベルトも既に逞しき若者となり、性質極めて鋭敏なりければ、父も末頼もしきものに思ひ、彼をニッカーカッスルの學校に送り、ロベルトは種々の工業雜誌を求め來り、或は修業せし書籍を父に讀み聞かせ、實地の應用は父これを説きて、父子共に其の研究を進めたりければ、ロベルトの學力の進むと共に、ステイブソンも亦少からぬ知識を得たり。

ステイブソンの熱心と技術とは、遂にその鑛山主の心を動し、彼が多年の宿願たる蒸汽機關の發明を大成せしめむが爲に、その資本を給せむことを約せり。ステイブソンの喜譬ふるに物なく、彼は晝夜その發明に心を碎けり、やがて一の機關を發明せしが、試運轉の結果はその機關のよく八十噸の荷物を積める車を牽きて、一時間に四哩を走れり。賞讃の聲に耳を藉さで彼は銳意これが改善を圖れり、かくて、リバープール、マンチエスター線の計畫はじまれり。機關車は勿論、橋梁トンネル皆彼の考案によりて造られたり。一八三〇年九月二十五日、工事全く成りてその開通式を舉行せられぬ。式場の偉觀いふばかりなく、時の内閣總理大臣をはじめ、貴族、高官皆その式場に列し、莊嚴なる儀式果て、後、新機關車はこれらの貴賓を乗せて全速力を以

て馳せぬ、その迅速なること矢の如く、一時間の速力二十四哩と註せられぬ、一大驚嘆の聲は全國に響き渡りぬ、彼の成功を祝する聲はまたこれに伴へり、一職工ステイブソンの名は、今や王公をも凌がむとせり、されど、毫も舊時の困難を忘れず、固く奢侈を禁じ、單純にして平和なる職工の生活を以て無上の快樂となせり、

一三 修業論

松木直秀

何事によらず、業に就きては、怠るべからず、成功は急ぐべからず、成功に急なれば、退屈の念生じて、事遂げ難し、業に就きて、怠らざれば、面白み、その間に生じて、成功の全きを致すべし、學問の道は、事業の中にも、最も、難きものなれば、最も、このごろに、心得なくばあるべからず、然るに、學

修業
束脩

廢學
廢疾
廢兵

精力
勢

暫時
漸次

生の常として、初めのほどは、随分能く勉強すれども、やうやくにして、退屈の念を生じ、その甚しきは、遂に廢學するに至る者あるは、畢竟成功を望むこと急なるによれり、大工左官の如き卑近の業すら、猶かつ數年の年季を入れて、これを修むるにあらざれば、その大工なり、左官なり、一人前の職工とは、なる事を得ざるにあらずや、まして、人の人たる道を修め、士大夫の師表たるべき學問の道にして、さも容易に、成就すべきものならむや、元來、人の精力は、かぎりあるものなれば、非常に、勉強するは、かへりて、非常の怠を生ずる本ともなるべし、非常の勉強を要せず、眠食、常を失ふことなく、職ある者は、職に従ひ、産業あるものは、産業を治め、さて後、暫時にても、暇ある時、心を專一にして、修業すべし、朝に温めて、夕に冷すことなかれ、昨は勤めて、今は怠ることなかれ、

かくのごとくにして、日々に變ずることなく、月を累ね、年を積み、やまざらむには、餘業に學ぶ者と雖も、成學の効驗、必ず見るべきなり。事業中、最も難しとする學問の道すら、既に、然り。ましてその他の如き、この心得を以て勉めたらむには、何事をかなし果さざらむ。

一四 苗代

詩作
毛作
短冊
紙色

笛苗

花に背きて作を思ふ農夫の心、勤勉かはた風流か、展へられたる短冊、苗代に種子をたろすさま、女文字に走り書きするやうなり。水、鏡の如し、たつる種子はしきりに小紋をゑがく、日照ること三日、水落ちて、種子むらなく芽さす、雨降ること半日、水と苗と高さを等しうして、ごもに三分を出でず、更に

縁縁

照ること五六日にして、苗寸に暢びて縁拭へるが如し、臨めば筆執りて物書きたきやうなり、更に降ること一日、苗ますく、暢びを競ひて、水これに及ばざること七分、雨の力日の力かはるがはる染め干して、黒きまで濃き苗は、今や數寸に及ぶ、案山子の力、亦これに與れり、農夫はあつく三者の力を多しして、己少しもその功に居らず、勇ましき歌ト調にひききて、少女かひく、しく早苗を取る、根を洗ふ童子は、苗代尻の細江に腰まで濡せり、白髪まじりの老翁よりく、少女と童子との勞を褒めつゝ、苗を運ぶ、さながら堯舜の民なり。

一五 感味すべき俳句

さをごめや哭く子の方へうゑて行く。

瓜瓜 精靈 供靈

帷惟誰唯堆推椎

之を吟ずれば、親の子を思ふ情想ひやらる、

遠江の國天龍川の邊に、老いたる賤の男、孫を喪ひて、その翌年の七月孟蘭盆に彼が孫の位牌に靈供をそなふまで、

去年まで叱つた瓜を手向かな、

この句を吟ずれば、恩愛の情、涙もたつるばかりなり、

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな、

園女の句なり、極暑の様子察せられて、實に女の句ぞ知らる、何事も上手に至れば、自ら獨特の妙あり、

賴政がひろひ残しゝ椎もがな、

不角はこれを読みて位をすゝめられけり、

又總州邊にて俳諧を好むひそり者の方に、盜賊入りて、家内の器財悉く盜み取り、その俳諧師を手厳しく柱にくゝりつけて、ちつとも動さず、俳人のいふやうは我少しの望あり、

宗祇 祇園 祇神 祇

今かくのありさまになれば、金銀財寶一として惜しからねど、笈の内に入れ置きたる、宗祇自筆の伊勢物語と、床の間に置きたる、末の松山の文臺をば、我に與へ給へといへば、賊將聞届けて、さもあらけなくひそり出して、投げやり、俳人の繩目をゆるして、盜賊どもは出で行きけり、さるにても、只今かれが乞ひたる書物と、文臺とは、結構なるものにや、立ち歸りて奪ひさらむとて、戶外に佇み、内の様子を伺ひけるに、俳人は愁ふる色目もなく、燈かきたて筆と紙とを手にもちながら

ぬす人も跡さざし行く夜寒かな、

こ、くりかへしくりかへし、ひそり吟じ居たり、盜賊ら大に此句に感じ、今宵奪ひとりたる道具どもを悉く返し與へ、かゝる無欲なる面白き人は知らず、狼藉したりとて金を多

くあたふるを、俳人あへて取るこそなかりけり、然るに、四五日たちて、樽肴に熨斗包添へて、竈の前に、たける者あり、正しく、かの盗賊のわざと思はれけりこそぞ、(雨窓閑話)

一六 田園趣味

新保馨次

朝日の光は緑なる野に満ち、そよ吹く風は花の香を送る、小川の水悠悠々流れ、菜島の蝶ひらく、こ飛ぶ、都の人が鉢植にすこいふ、董も籠に飼ふこいふ、鶯もこには只見るがまゝ聞くがまゝなり、父は作物の手入せんこて、鋤をかたげて野に行けば、子等は田を鋤かむこて、引出す春駒の聲勇まし、母の運ぶ辨當には團子の大き拳の如く、各々若草を敷き清水を汲みて食す、其味山海の珍に勝れり、天地の愛に包まれて、健康愉快なるは農夫に及ぶ者なし。

翻々

辨花辨論
辨髮辨當
天宙地

黃梅時節
梅雨
五月雨

新樹の緑深く、梅の實漸く熟せんこする頃は、苗代の苗已に成長し、小さき手を以て人を招くに似たり、これより、時候梅雨に入り、一年最も陰鬱なる季節と云はるれども、農家に取りては、植附の時にして雨は實に甘露なり、家々の男女各々小奇麗なる衣服に著換へ、若き女は赤き褌をかけ、新しき手拭を冠り、列を成して苗を植う、田植歌の聲流るゝが如し、植ゑ終りて、水をせき入れたる景は正にこれ一大花園なり、此時麥已に熟して、雲雀の聲は轉居を急ぐ者に似たり、盛夏の田の草取は農業中の最も苦しき者なれども、家に歸りて行水を使ひ、夕食を終へ、『夕顔棚の下すゝみ』をなすこきは、涼風特に快く、晝間の勞苦を償ひて餘あり、秋は淋しきものこ歌はるれど、農家の爲には一年の黄金時代なり、丹精したる稻は熟して、黄雲十里こいふべく、稻を

刈る人、脊に負ふ人、落穂を拾ふ雀まで、忙しく嬉しげなり。
今日は東隣、明日は西隣、豊作を祝ひて互に相招き、酔へる
顔は門前の柿と赤きを争へり。
冬は收穫已に終り、残れるは大根引なり。太郎が引く力あ
まりてうしろに轉ぶもをかじ、繩なひ薪を集め、澤庵を漬
けて専ら來年の用意をなす。
屋外風寒く、雪白けれど、内には槽火の影赤く、一家爐を圍み
て、銀杏を焼く子供あり、母の膝に眠れる小兒あり、澁茶をす
ゝる老父あり、斯る田園の樂は都の人の夢にも見ざる所
なるべし。

一七 伯林通信

芳賀 矢一

益御清穆賀し奉り候。小生儀九月八日横濱出帆十月十九

日に伊太利のゼノアに上陸しそれより巴里に参り一週間
ほど大博覽會等見物致し同じく二十九日に當府に安着仕
り候。初旅の事ゆる百事目新しく異域の殊俗不思議に感
ぜられ候點も尠からずその中小生の歐洲に入りて第一に
意外に感じたる一事を申し上げ候へば生活の工合の一般
に質素なる事に御座候巴里の如き豪奢の都會にても市人
の暮し向きは極めて儉素なるものなる由當國などは殊更
然様に存ぜられ候。婦人の衣服等も上を見れば際限なか
るべけれども普通外出の羅紗服の如きは四五圓位にても
調製相叶ひ候。これは衣服店の正札を見て知り候。我國
にて中等以上の家庭ならば婦人の衣服一領如何に廉くご
も二三十圓乃至四五十圓はかゝり申すべくその上羅紗に
比ぶればもちも悪しきゆる非常に高き割合に相成り候。

全體の富の程度より申せば日本婦人ほど衣服に贅澤なるものはなしとも申すべきか。

婦人に限らず男子の服も同様にて衣食住三つの中衣服のみ日本人最も奢りて居るやう感ぜられ候。羅紗服は雨を嫌はぬ故西洋の婦人は雨天にても蝙蝠傘もさゝず街道を歩み行くものこれあり候。その速きこと男子の及ぶ所にあらず余等の眼より見れば餘りに活潑に過ぎて女らしからぬやうに思はれ候。總じて西洋にては男女の區別なしとも申すべきか衣服にても花模様などある美しきものはなく黒茶濃茶等無地物にて少女などが紅色の袴を穿ち候のみ。釦などを見ても男子の少しもかはらず今少し女らしき風俗もがなご友人に話し合ひ候事も御座候。佛國にて婦人に髻のあるもの頗る多く老婆などには小生位の

區別

髻鬘
ゲホヒクヒア
ヒジチゲゴ

素麗
端立派

髻はいくらもこれあり候。當地にてはあまり見受け申さず候。

又西洋にては途上にて物を喰ふことは少しも恥させず立派なる淑女が麵包菓物などを食ひながらあるき居るはこれをもかしく感じ候。大學内にては男子の學生は固より女子の學生まで廊下にて立喰ひいたし居り候。兎も角風俗異なれば感心することもあり感心せぬ事もあり我がをかしと思ふ事も彼れには當然の事となり居るやうのこと比々皆これに御座候。安着かたぐい一二冗言申述べ候

匆匆

一八 獨逸留學中の所感

日 高 眞 實

普國は嘗て、ナポレオン一世の大打撃を蒙り、國內、たはかた、

佛軍の馬蹄に蹂躪せられたれども、後には、一舉して、佛國に克ち、ゼルマン聯邦の盟主となりて、威武を、歐洲に輝せるのみならず、商工業等を以てしても、英國を凌がむばかりに發達したるは、洵に偶然のことにあらず。余はその國の首府、伯林に往き、はじめて、その理由あるを感じたり。歐洲國民が生活の度の高きことは、かねて、聞きしところなるが、英佛等の國に往き、目のあたり、その實況を見て、遙に想像にも優れるに驚き、更に、ゼルマンに往きては、全く、想像と相反して極めて、質素なるに驚きたり。ウ井ルヘルム老帝が勤儉尙武の遺訓を垂れられたることは、史上にたいして、ほとゞ知れる所なるが、その風のかくまでに、遍く行はれたりとは、更に、思はざりしなり。獨逸人は、この風に安ずるのみならず、これを以て大に誇るべきこととせり。身分ある紳士

すら、家にありては、裝飾もなき素朴なる卓上に、冷なる肉と、一瓶の麥酒とを並べて、これを嘉肴とも美酒ともしつゝ、満足するなり。某の博士など呼ばるゝ知名の人を訪ねしに、書籍、紙片など、あたり狭きまで列ねたる書齋に延き入れ、諄々として、學事を談ずるさまの、いかに、質朴にして、その生活の儉素なるは、我が國人の思ひ到らざる所なり。倫敦、巴里を見たる眼にて、伯林を見れば、實に僻陬の都會にすら及ばざる心地するなり。余は、一日、伯林より、程遠き地方に旅行して、或家に宿りぬ。主人はさばかり教育ある人とも見ゆざりしが、余に醢藏の肉と麥酒とを供し、『さて遠來の珍客を饗應すべき物とては、あらず。われ等は、わが國の軍備と、教育とを完備せしめむがため、多額の租税を上納せるを以て、平常、節儉せざるべ

からず、こは、ひこりわれ等のみにあらず、國民みな然るを以て、君も、これを諒せよ、されど、そのかはりに、我が國の教育、軍備を熟覽して家づこもし給へ』なごいひぬ、國民一般、この思想を以て、國家に對したれば、僅々たる歲月の間に現今の如き、強國ともなりたるなり、而して、獨逸人は、かく、質素なるのみならず、最も、勤勉なる人種なり、いづれの國にても、我が日本の事は知るもの少く、我が國語を用ふる者に至りては、絶無ともいふべき程なるを、彼等は東洋に商權を張る必要なごのありてにや、學生の間には、我が國語を用ふて談話する團體さへ設けられたり、古人、勤儉を以て、興國の本とせしが、獨逸の地を踏みて始めて、その言の信なるを知れり、老帝の遺訓が、かばかり、國民の腦裏に徹底して、なほ、今日實行せらるゝは、畢竟、大蹉跌を

なしゝにもよるべけれど、また、國人の氣質にもよることなり、この氣風は、今より興起すべき我が國民にこりては、最も、よき模範たるべきなり、

一九 虚業家

徳富蘇峯

近頃、切齒扼腕ステツキを振り舞はし、高履を穿ち、世のいはゆる壯士すら、手提革囊を提げ、新形の脊廣を著、『實業家になれり』と、吹聴しあるくを觀れば、また實業風の社會に吹き渡りたる事を知るべし、然り、實業風は實に日本全體を動かしたつゝあるなり、世の有志家と稱せらるゝものにて、政事専門を罷めて、實業に著手せむとするものあり、學校卒業生なごは、いづれも、その目的は、實業家たらむごいふもの尠からず、甚しきは、父祖傳來の田畑を賣却して、實業社

會に手を出ださむとするものすらあり、この實業風の社會を動かさつゝあるは、これ一應祝すべきが如く思はるれど、然らず。

かくの如く、實業風を生じたる原因は種々あれども、その原因の中にて、最もなる一は、人々が生活の度、収入の度よりも超ねたるゆゑに、即ち、格外に驕奢となりしがゆゑに、金銭の必用を生じ、金銭の必用よりして、遂に皆實業家となり、一攫千金の奇利を博せむとするものゝ如し、これらは實業家といはむよりも、むしろ虚業家といふべきなり。

一攫千金、快はすなはち、快なり、而して何によりて、これをなすべきか、別に善き手本も無し、すなはち、かの十數年前よりして、大倉喜八郎、藤田傳三郎諸氏が、なしたる事を再演せむとするに外ならず、然れども、奇利羅し盡して、剩すも

の甚だ、少し、かくて、米相場、請負、拂下、また、用達などいふことに流れて、いよいよ、その拙を増し、ますます、その醜を加ふるのみ。

もし、人間たゞ金銭を得むがために、生活するものにして、金さへ得れば、如何なる手段にても、差支なしとせば、掏兒も可なるにあらずや、竊盜も可なるにあらずや、かのいはゆる虚業家のなす拂下、また、請負といふものも、これに比して、僅に五十歩、百歩の差あるのみ、かれらは皆正當の手段を俟たず、その當然なる原因を踐んで、その必要なる結果を求めず、唯、おながらにして、奇利を博せむと欲す、これ豈、悪むべく、卑むべきの甚しきものにあらずや、かれらが腦裡に存するものは、たゞ、僥倖心のみ、僥倖心は、冒險心と同じからず、冒險心は、危難を抵當として、その奇功を奏せむとす

るものなれど、僥倖心に至りては、抵當なく、唯安逸にして、他の勞作の結果よりも、更に大なる利を得むと欲するものなり、されば、僥倖心に満たさるゝものは、畢竟、薄弱なる人間といはざるべからず、かれらは種子を播かずして、收穫を欲す、何故に種子を播かずして、收穫を欲するか、種子を播くべき勞を厭ふがゆゑにあらざるや、かの天地間、百中僅に一二ある偶然の出來事を目的として人生、生活の用に供せむとす、愚もまた甚しからずや、偶中なほ可なり、その偶中を得むと欲して、汚爲濁行に至らざる事なし、而してかくの如きことをなし、靦然として耻づる事を知らず、なほ、厚顔みづから實業家といひ、而して世間またこれを諂むるものなし、世の道德の制裁は何ぞそれ衰へたるや、吾人は、實業風を排斥するにあらず、人間一日も徒食すべきものに

あらず、たのれの麵包は、たのれの汗に頼りて、食まざるべからず、苟も然れば、一日たりとも、利用厚生の術を講ぜずして、やむべけむや、苟も講ずべきを知らば、世人が實業を重んずるは、最も悦ぶべき事といはざるべからず、たゞ、それ、實業が名、實業にしてその實、實業の假面を被りて、社會の罪惡を犯さむとするに至りては、これを嚴責せざるを得ず、人は勤勞の動物なり、苟、生を社會に享くるものは、皆、勤勞せざるべからず、わが邦は農業國たるに拘はらず、開拓の業、甚だ、開けず、その人口の百分の五十は、全く、農業に生活するものにあらず、歐洲諸國にては、その國土百分の四十、乃至、五十は、耕地にて、その他牧畜に供する部分、甚だ、廣きに拘はらず、わが邦にては、耕地といふものは、全國土のたゞ百分の十一餘に過ぎざるが如く、實に農業にても、その業を營む

餘地甚だ廣し、まして今後工業商業の如きは、祖鞭を著くべき地甚だ多きをや、然るになす事、こゝにいでず、唯僅に肩を聳かして諛ひ笑ひ、五尺の身體を屈して、自己の良心を瞞着し、僅にその僥倖心を饜かしめむす、かくて、僥倖心を饜かしめたる結果は、酒に耽り色に溺れ、世俗の人よりして、紳商といはるゝに過ぎず、何ぞその志望の卑劣なるや、それ、アングロサクソン人種の如きは、その生を圖らむために、或は身を萬里の波濤に託するものあり、或は印度の如き、熱天、燦地、燒殺せらるゝが如き土地に棲息するものあり、或はグリーンランドの如き、夜長く、日短く、滿目氷塊、たゞ海豹の群をなす間に、生を送るものあり、然らざるものは、或は陶器の藥料を發明せむと欲して、自己の椅子をも薪として、くべ去りしものありき、すべてその富を得るや、或は心を

勞し、或は力を勞するも、畢竟勤勞の二字よりきたれるなり、然るに、これを思はずして、徒に奢侈の生活に耽り、而して東洋の商權を握らむとす、それまた難からずや、

二〇 奢侈論

添田壽一

奢侈とは何ぞ、人類の生存、進歩、若くは合理的幸福の増進に益なく、却つて生産力を害する消費をいふ、

生存に闕くべからざる日用の必需品は勿論、正當なる幸福を増し、生活の情態を高むるに要する普通用品の如きは、固より奢侈品にあらず、但し、奢侈は相對的の語なるを以て、各國の情況、各人の位置、及び消費の多少等によりて一定せず、甲の奢侈品は乙の普通品となり、丙の必需品となることなきにあらず、されど、試みに本邦の現状を標準として

相對的
絶對的

主因

普通人の衣食に供する物品を觀察すれば、綿布、穀物、鹽、味噌、醬油、薪、炭、油、野菜の如きは日用の必需品にして、絲、入織物、砂糖、魚類、肉類、菓子の如きは普通用品といふべく、絹布、酒、煙草の如きは奢侈品たるを免れざるべし。抑々奢侈の起因は何にあるか、蓋し、その主因となるものは人心の傾向にあり、人の有せざる所、吾之を有すと誇る虚榮心、その一なり、外見、他聞をよくせむとする修飾の情、その二なり、己の耳目、口腹の慾を逞しうせむとする肉慾、その三なり、實用を棄て、流行を逐ふ好奇心、その四なり、これらは何れも、人情の弱點にして、人皆多少の萌芽を有せざるはなし、若し、習俗、事變等の副因ありて、之を助成せむか、譬へば、油を以つて薪火に注ぐが如く、その勢猛烈にして、一切を焼き盡さずむば已まざるべし、かの戦勝の結果が人心を驕泰ならしめ、

戦慄

金銀坑の發見が各人の収益を過信せしめ、投機心、射倖心の勃興が人をして金錢を土芥視して、優柔情弱に流れしむるが如きは、何れも奢侈の副因たるものなり、人若し奢侈の結果に思ひ到らば、誰しも寒からぬに粟せざるはあらざらむ、之を個人についていへば、

- 第一 人をして不健康、無氣力ならしむ、
- 第二 輕薄不徳ならしむ、
- 第三 負債に苦み、投機を試みしむ、
- 第四 破産零落に陥らしむ、

更に、國家についていへば、

- 第一 不生産的消費を増加す、
- 第二 資本の減少を致す、
- 第三 物價の騰貴及び外國起債の已むを得ざるに至る、

騰貴

第四 國家の元氣を沮喪せしむ。

第五 貧富懸絶の觀を顯著ならしむ。

奢侈の結果の恐るべきことかくの如しとせば、國家も個人も、極力之を防止せざるべからず、其策如何。

第一 各人自ら奢侈を慎むこと。

第二 市町村の申合せ、規約、又は信用組合等によりて、共同して奢侈を戒むること。

第三 社會も亦奢侈の風を排斥すること。

第四 國家は奢侈的消費に重税を課して、これを防止する方針を取るること。

等是なり。就中、第四の方法の如きは、最も直接にして且有效なるものとす。然れども、自己若くは共同の力により、内心より人情の弱點を慎み、自ら進んでその主因を杜絶する

ここを務めむこそは、健全にして勇氣ある國民の本領なるべけれ。

二 貯蓄

二 宮尊徳

多く稼ぎて錢を少なく遣ひ、多く薪を取りて焚く事を少なくす、これを富國の大本、富國の達道といふ。さるを、世の人これを吝嗇といひ、又強慾といふ。これ心得ちがひなり、それ人道は自然に反して、勤めて立つ所の道なれば、貯蓄を專要とすべし。貯蓄は今年のを來年に譲る一つの讓道なり、親の身代を子に譲るも、すなはち貯蓄の法に基せるものなり、人道はいひもてゆけば、貯蓄の一法に歸す。故に、これを富國の大本、富國の達道といふなり。

三 十錢銀貨の來歴談

坪内雄藏

我はもご但馬國生野の鑛山にありし銀のあらがねなり、先年掘りこられ、精製せられて、純銀となり、明治二十六年、大阪造幣局につれゆかれて、そこにて型に入れられ、十錢銀貨といふ名を貰ひ、やがて數萬の兄弟と共に、某銀行に渡されたり、それより、始めて世間に出て人々の手より手へ、渡り歩きの忙しさ、或る時は一日に、數百里を走り、又、或る時は、一時間に、數十個處を経めぐり、今日までの間に、凡そ日本の國內は、何れの隅々も、我が知らぬ所は殆どなし、この間の出來事を一々語らむは、もごより難し、今は面白しと思ひし二三の話ばかり語らむ。

二年以前、我は某紳士の車代となりて、東京の神田區にて若き車夫の手に渡されき、さて、其の車夫の腹かけのかくしに入れられてありしが、夕飯後、件の車夫は衣服を著かへ、破

れ袴を著けて宿を出づ、意外の事かなと思ふうち、ごある學校の教場に入りぬ、夜學に通ふなりけり、三時間の後、車夫は宿に歸り、ランプの下にて、更に書物を默讀すること、十二時頃に及びたり、さて、寢に就き、翌日は朝五時に起き、辻に出で、車を挽きて終日かせぎ、夜に入れば、また學校に通ふこと昨夜の如し。

かゝる苦學の書生もありと、噂には聞きたりしが、實際には、はじめて見て、そらろに感に堪へざりき、永くこの人の側にありて、その行末をも見たしと思ひしに、やがて兄弟分の貨幣二つ三つと共に、我は一冊の書籍にかへられ、或る書肆の手に渡されたり。

かくて、書肆より印刷所へ、印刷所より職工へご渡り、さて件の職工より家賃ごして、或る家主の家に移りしが、この家に

渡され
乗せられて

て、我は兄弟分四十九人と共に一包みの棒に束ねられ、同じ様の棒數十箇と共に、暗く冷き金庫の中に入れられたり、窮屈、退屈、忍ぶべからず、早くこの蓋を開けよかしと念ぜしかひもなく、三日経ても、五日経ても、明かばこそ、都合五箇月目にして、やうく取り出され、或る小間物店の主人に渡されたり、さて、小間物屋にて、我等の一半は品物の仕入金となりて、問屋に拂はれ、残る一半は若干に分たれて、種々の用途に立ちしが、我はその中にて、地方廻りの手代に渡されて、小間物の荷物と共に、上野の停車場より汽車に乗りて、福島縣若松の近村に著きぬ、かくて宿料となりて、兄弟三人と共に、その村の宿屋に渡され、翌々日は、更に米代となりて、或る農家の手に渡りたり、その日鎮守の社の大祭あり、我は、その農

息子息
息女子

機もが
見に行かば

滞留
滞在

落ちぬ
あり様子

家の息子太郎吉の小使錢となりて、賑やかなる村の祭禮に伴はれ、その晩、遂に西洋手品の木戸錢に拂はれたり、この手品師、若松より米澤、米澤より秋田、秋田より新潟とめぐりめぐりし間に、我ばかりは、不思議にもつまみ出されずして、遂に敦賀、大津、京都を経て、故郷なる大阪に立ちかへりぬ、日に開け行く御代のことなれば、五年以前にくらべて、かはりたる處も多かるべし、願はくはこの手品師の手より離れて、都會見物の機會もがなと祈りをりしに、或る日の晝過ぎ、遂に幸運を得て、散髪屋の手に渡りぬ、さて、この散髪屋より、その日、直に呉服屋に渡りしが、呉服屋に二三日滞留中、新に錢箱に入り來りたるあやしみの貨幣あり、顔かたちいさゝかも我等の兄弟にかはる所なけれど、ごごこなく腑に落ちぬ様子あり、かくて、翌朝我等は集め

落ちざる様
子あり
已に落ちぬ
已に落ちたぬ
り

出されて
宣告せられ
て

六四
られて、數百の兄弟と共に銀行に持ち行かれたり、銀行に
ては、洋服著けたる役員、我等を一室に入れて、一つ一つに檢
査を行ふ、この検査室には、我等の仲間あまた居たり、大
なるズツクの袋に入れられて、室の隅に集れり、さて、役員
の、我等を検査するこの早さは驚くに堪へたり、つまみ
て投ぐるよご思ふ間に検査は終るなり、此の時、彼の怪し
の貨幣は忽ちにして見咎められ、板の上に投げ出されしに、
その音甚だ濁りたりしかば、贋造と宣告せられて、かたはら
の籠に投げ込まれき、銳きは役員の眼なりけり、その外
にも、はね出されしもの尙三枚ありき、銀行の金庫にある
ここ七日にして、我は引き出され、某藥舗の貯金利子として
支拂はれき、
それよりさきも、處かはれば品かはりて、見る物毎に珍しき

節儉と吝嗇
との別

世の中の有様、こゝに語り盡すべくもなし、總じて都會の
かたは取引しげければ、我等も晝夜も殆ど休むひまもな
く、西へ東へかけあるき、ここに晦日の夜の如きは、目も昏み、
氣も絶ゆるばかりなれど、我等も旅行好きの生れなれば、
苦しごは思はず、物靜かなる地方の人の手に渡り、或は吝嗇
家の庫に藏められて、何箇月も休み居る間こそなか／＼の
苦しみなれ、わが経來りし數萬の人の中にも、節儉と吝嗇
との別を辨へ、よく集め、よく散ずる人は甚だ少なし、而も
その自在を得ねば、財産家にはならぬごぞ、君たちよく
よく心得たまへ。

二三 人事難しと覺悟すべし 福澤諭吉

社會の人事は、都て貿易の主義にして、苦樂勞逸相互に因果

宿醒
醉醒

こなる約束なり、毎朝早起、寒暑風雨を厭はずして、勞役運動するは、頗る、苦しけれども、其苦痛の代りに、朝の食事は、特に旨きを覺ゆ、深更にいたるまで、酒盃の愉快は、愉快なれども、翌朝の宿醒は、言ふべからざるの苦痛なり、少年の苦學、誠に、苦しといへども、年長じて、無學文盲の不自由、不外聞は、苦學の苦よりも苦し、壯年時代に、血氣の百慾を、慎みて、小心翼翼々内外の事を經營するには、人にも語るべからざる程の苦痛多けれども、老年にいたりて、一點の心障りなく、天下晴れての快樂は、前後相償うて、餘りあるべし、されば、人生の行路は、千辛萬苦にして、この辛苦を切り抜くは、至極難きことなれども、世間の人は、動もすれば、その難き所以に心付かず、一切萬事を易く視て、容易に浮世を渡らんとする者、多きがごとし、學生は學問を易しと思ひ、事務家は事務を

易し
價安し

易しと思ひ、本來、免るべからざる苦痛を、苦痛とせずして、恰もこれを輕蔑するが故に、怠慢の心、生ずるなからむと欲するも、得べからず、即、これ、その學の成らざるゆゑなり、事務の擧らざるゆゑなり、人事困難は、文明世界の約束にして、一として易きものはあるべからず、婢僕の仕事にても、念入れて勤むれば、決して易からず、昔、木下藤吉が、信長の廐別當に召抱へられて、主人を満足せしむる程に働かし、その時には、藤吉も別當の仕事、容易ならぬ大事として、勤めたることならむ、況、別當以上の事務に於てをや、筆生、勘定方等の小より、局長、總裁の大にいたるまで、事として、難からざるはなし、もし、或はこれを容易なりと云ふ者あらむか、その實は、事の容易なるにあらず、唯當局者の怠慢、これを等閑に附して、自、苦しむべきを、苦しまざるが故に、その

稱稱
俗正

徹徹
去夜
轍鮒

易きを覺ゆるのみ。現に今日、官私の事務局に於ても、萬般不行届と稱するものは、必ずしも事に當る人の不才に非ず、才智の叢淵と稱する處にても、仕事を軽く見て、注意を怠るが爲に、失敗するもの多きを見るべし。此邊より考ふるべきは、穎敏なる才子よりも、寧ろ根氣強き勉強家こそ頼もしいけれど、いはむと欲するものなり。然のみならず、事を怠りて身閑なるは、百慾發生の媒介にして、皆にその事の擧らざるのみか、又隨ひて、弊害の大なるものあるべし。閑居不善を爲すは、獨り小人に限らず。かの劇務に當ると稱するものが、往々酒を飲み、夜を徹し、事務家にあるまじき舉動して、平氣なるは、畢竟、人生行路の艱難を知らずして、事を易く視るの罪なり。社會の組織、果して、貿易の主義に違ふことなくんば、この輩の行末、トし得て、憐むべきものなり。

二四 渡 舟

しだれ柳の影ひたす、
村と村とのさかひ川、
波があや織る土手際に、
今日も人待つ渡守、
雨の日、風の夜、朝夕に、
渡呼びつゝ來る人は、
旅あきうごや、村の爺、
町の女房、役場員、
竿かたげたる魚釣や、
獵犬つれし若紳士、
西國巡禮、角兵衛獅子、

竿竿竿

郵便配達、小荷駄馬、

なりも言葉もいろいろが、

暫し乗り合ふ舟の中、

知るも知らぬも知りあうて、

語る間もなく向う岸、

思ひ思ひにわたりたちて、

西へ東へわかれ行く、

ゆくを送れば、又來たる、

相手は日日にかはれども、

かはらぬ流れ、同じぬし、

岸の青柳、水の月、

波間の鳥もなじみにて、

春秋いくつ重ぬらむ、

二五 澁澤男

武藏國榛澤郡血洗島

修治徳川家達

指導誘導

澁澤男爵、名は榮一、幼名を榮二郎と曰ふ、青淵は其の號なり、武藏の一農家に生る、家は藍製造を業とせり、天性伶俐にして、大志あり、幼少の頃より學問を好み、家業を助くる傍、讀書を怠りたることなしと云ふ、二十二歳の時、志を立て、江戸に出て、漢籍を修め、劍術を學び、後京都に至り、一橋家に仕ふ、已にして、徳川民部大輔に従ひて、佛國に赴きしが、時恰も明治維新にあたり、止むなく歸朝の上、静岡藩勘定組頭を命ぜらる、同二年、大藏省に出仕して、租税正となり、進んで權大丞となりしが、國家を繁榮富強ならしむるには、實業を盛にする外に途なきを思ひ、自ら實業界に入りて、その指導者たらむとし、明治六年、官を辭して、第一銀行の設立に力

紡績
成積
堆積

調測
稠潤

をつくし、後自らその頭取となる、續いて商業會議所を起して商業者、工業者の利益と便利とを計り、また紡績事業の必要なることを思ひ、大阪紡績會社、三重紡績會社などを起しぬ、明治十七八年の頃、我國海運業混亂の有様となり、三菱會社と共同運輸會社との間に劇しき競争起り、何れも大損失を蒙りしかば、氏はこの間に立ちて調停の勞をこり、遂に兩社を合併せしめて今の日本郵船會社を起し、我海運業の今日の如き隆盛なる基を作りぬ、其他鐵道、瓦斯、電氣製麻事業など、すべて世の進歩を助け人の幸福を増すべき事業の新設經營は、多く氏の力を藉るに至れり、かくて、氏は二十三年に至りて貴族院議員に勅選せられ、三十五年勳功によりて男爵を授けらる、氏身を我國實業の發達に委ね、東奔西走、席の温まる暇なく、常にその指導助長の任に當り

居常
日常

精出
努力
出す

て倦むことなし、實に我國實業界の王とも稱すべく師とも仰ぐべきなり、殊に身を公共のためにさゝげ、慈善事業に力を盡していたづらに私利をはかることなき清廉と、居常寸閑あれば古今の書を繙く良習慣とは、特に吾々の大に學ばざるべからざるどころなり、

二六 事業の人

大町芳衛

勤勉なるを要す、

規則正しく事務に精出して、如何に繁忙なるも、倦まず、撓まず、骨身を惜まず立ち働くをいふなり、心身の安逸を貪り、空想に耽り、烟草と親しみ、空談を好み、よろづ腰重く、姑息に流れ、今日なすべきことも明日に譲るやうにては、事務たのづから滯滞して、事業は擧らざるなり、

果斷なるを要す。

頭腦は明確にして判断力に富み、事の利害得失を識別し、機に臨み變に應じ、判断して迷はざるをいふなり。機會は汽車の如し、今くるかと思へば、忽ち去つてその跡を見ず、優柔不斷、徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇して、斷行すること能はざるやうにては、折角、好機會に遇ふとも、その機會を捉ふることも能はずして、事業は擧らざるなり。常識の完全なるを要す。

ひろく世事に通じ、よく物の道理を辨へ、是非に明かに、事に處してその當を得るをいふなり。常識不十分なれば、迂濶となり、偏屈となり、判断を誤り、應用を誤つて、事業は擧らざるなり。機敏なるを要す。

よしや一を聞いて十を知るまでには至らずとも、よろづ悟り早く、目先さごく、常によく機先を制するをいふなり。遅鈍なれば事の間にあはず、萬事人後に落ちて、事業は擧らざるなり。膽力あるを要す。

ためず、臆せず、大事に臨んで駭かず、危急の際に従容自若たる餘裕あるの謂ひなり。氣小に、臆病に、恐怖心常に胸にみつるやうにては、氣象萎靡して、到底大事を斷ずること能はず、卑屈となり、因循となり、引込思案のみして、事業は擧らざるなり。

確實なるを要す。

堅く信を守り、然諾を重んじ、言行一致し、主義一貫し、人をしてたのもしと思はしむるをいふなり。輕薄にして、物

事に忠實ならず、約を破り、信を缺き、誠心なくて、漫に小策略を廻らすやうにては、信用たのづから失せて、事業は擧らざるなり。

質素なるを要す。

よく慾を抑へて、みづから奉ずること薄く、よろづ贅澤を慎み、費用を節するをいふなり。奢侈に耽らば、取れば取るほど金足らず、つひには、苦しさまぎれに不正手段を行ふに至るべく、弊害百出して、事業は擧らざるなり。

意志の強きを要す。

一度決心したることは飽くまでも斷行し、區々たる情實に拘束せられざるをいふなり。決行の勇氣なく、障害に怖れ、失敗に屈するやうにては、到底競争に堪へずして、事業は擧らざるなり。

二七 偉人

大町芳衛

偉人は概して体力強きものなり、中には過度に身心を勞せしため、年こりて身体弱くなれるものなきにはあらねど、その少壯の時代には皆壯健なりしもの、如し、少時壯時を通じて病弱なるものは、あまりはなれざるべし。偉人は概して精力強きものなり、わが爲す事に熱心にして、大に勉強してもさまで疲勞せず、また倦まず、わづらはしきを厭はず、困難に屈せず、あくまで初一念を通さずんばやまざるものなり、疲れやすく倦みやすくして根氣なきものは、到底はなれざるべし。偉人は概して勝氣なるものなり、ナポレオンが『不能といふ字はわが辭書中になし』といへるは、よく偉人の氣象

悔悔悔

己己己

辱くす
辱うす

をあらはせるものなり、氣が弱くては、ごてもねらくはなれざるべし、
偉人は概して自信強きものなり、大事業をなさむには自ら信じ自ら任ずること重からざるべからず、自ら輕んじ自ら悔るものは、遂にねらくはなれざるなり、

二八 格言四則

天は自ら助くる者を助く(西國立志編)

懶惰なる頭腦は魔鬼の工場(同)

禍福無_レ不_レ自_レ己_レ求_レ之_レ者

凡_レ事_レ豫_レ則_レ立_レ不_レ豫_レ則_レ廢

二九 矢野二郎翁と一青年

一青年あり、商業教育の元勳矢野二郎翁の知を辱うす、學

恩願
恩眷

治療
治療を施す

校を出でし後、翁の紹介によりて某會社に備はれ居ることあり、一日突如として翁の許を訪ね、悄然として謂ひて曰く、『生や先生の恩願によりて以て現今の地位を得たり、心常に深く謝す、然れども、之を今日までの實驗に徴するに、今の業務は、到底、生に適せざるを覺ゆ、願はくば先生、幸に、更に生の爲に、適職を與へ給へ』と、翁聽いて頗る之を憫み、乃ち溫言以て青年に語けて曰く、『痛ましいかな、人生、不幸多し、雖も、身に適せざる業務に服するばかり不幸なるはなし、いかに苦しかりけむ、健康も損はれつべし、もし病める事もやあらむか、速に療養せざるべからず』と、言々頗る懇切を極む、青年瞿然として曰く、『先生、さばかり苦しきにはあらず、何ぞ健康を損はむや、唯、われに適せざるが如く感ずること切なるのみ』と、翁驚いて曰く、『さ

装を正し
容を改め
端坐して

儼乎

淺慮
短慮
遠慮

らば之がために病めりといふにはあらざるか、『青年笑つて曰く、『然り先生、健康は益々良好なり』』翁乃ち襟を正して大喝して曰く、『去るべし、去るべし、疾く去つて速かに君が務に服せよ』』青年驚いて故を問ふ、翁乃ち儼乎として謂ひて曰く、『余は、君が如何にして現職の君に適せざるを知りたるかを解する能はず、心身の全力を注ぎ、身の健康を損ふに至り、かくて猶技能の進歩を認むる能はずんば、こゝに始めてその不適を斷ずべし、君は曾て病まず、曾て健康を損はず、何によつてかその適否を知るここを得むや』』青年低頭して暫し聲なし、己にして忽然として悟つて曰く、『誠に先生の言の如し、淺慮、先生を煩はし、慚愧に堪へず、はしなく一大教訓に接して、暗夜に光明を認めたるが如し、服膺して、更に奮勵一番せむ』』深く、その

訓誡を謝して、踴躍して辭し去る、(實業之日本)

主人より何か一の仕事を命せられ、少しく困難と見るや、奮勵一番之に打勝たんとはせで、かゝるむづかしき仕事を與ふるは主人の無理なりとて、己の缺點を恕する者あり、かくの如き人は必ず失敗す。

(成功坐右銘)

三〇 勉

強 その一

堀

秀 成

茶事は、もご、禪僧よりはじまり、足利義政天下の士に捨てられて、東山に隱遁して、自ら、茶を立てたるより廣まり、圍碁は、仙人めきたる老者などの、光陰を送る便さしたるものにて、素より、世間無用のわざなるは論なけれど、それすら勉強の結果として、實に不凡の境に至るものなり、況、世間有用の事に勉強せずして可ならむや、こゝに、茶事と圍碁との上に勉強せし物語をしるして、世間有用の事に勉強すべきこ

ごを知らせむ。

豊公、大阪城にたはしたる時、その傍を離さず、寵愛せられたる曾呂利新左衛門は、茶僧利休と甚だ不和なりければ、何の時に、利休に不都合をなさしめむと考へ居たるに、或年の冬、日のくるゝ頃より、雪頻りにふりいで、夜半に至りて、地に積ること七八寸にも及びぬ。時に、新左衛門思ひけるは、かゝる大雪の夜半に至りては、彼も怠りて、御茶屋の爐の火もたやしたらむに、忽然と御出あらば、さすがの利休も困却すべしと考へて、豊公の寢所の次まで参り、襖ごしに新左衛門申しけるは、『いかに、御寝ならせられしか、雪たもしろく降りて、御庭の植木美しうなりぬ、かゝる折、時雨の御茶屋に成らせられ候は、さぞご存じ候ふと』申したれば、豊公めざめられて、『いかにも然なり、手燭を點すべし』とて、寢衣の上

に、胴着を著られて、立出でらる。新左衛門前に立ちて庭の飛石を傳ひつゝ、時雨の茶屋に至り、折戸の此方より、新左衛門、聲をかけて、『利休殿、只今、これまで成らせられぬ』と告ぐ。利休、速に答へて、折戸口まで迎へ奉り、御先に立ちて、植込の枝にかゝりたる雪を拂ひつゝ、圍の内に入れ奉る。新左衛門も後にそひて入る。さるに何時の間にか、爐につきたる炭は盛んにたこりて、釜の湯、松風の音たて、爐の内に、薰物は、かをりて、早梅の香にあやまたれたり。新左衛門は、心中、案に相違して、この雪夜の深更に、よもやこたればぬしに、さても、油断なき利休かなと、あきれたり。かくて、利休は茶一服立て、参らす。豊公も宵の宿酒、猶、名残あるところに、思ひがけ給はぬことなれば、常にまさりて賞せられたり。新左衛門思ひけるは、今は我策も空しくなりぬ。何をがなと考へ

しが、かゝる深更に湯漬を命ぜられたらむには、これには利休も困却すべしと案じつきて、豊公に申しけるは『夜もふけぬれば、定めて、御空腹に、たはしまさむ、御茶漬を仰せ出だされて、然るべきか』といひければ、豊公『いかにも然るべし』とあり、利休畏まりて、水屋に立ち、先に、御迎に出でたる時、植込になれる柚の實二つ取りて、袂に入れ來しが、その肉をゑぐりこりて、味噌をつめ、爐にて焼き、綿入袱紗に包みたる飯櫃より、飯をもりて奉る、豊公、山海の珍味には飽かれたるころに、思ひがけぬ柚味噌を奉りたりしかば、殊の外、意に適はせられ、利休が職掌の上にかくまで、心を用ひることを喜び給ひて、加恩の沙汰さへありけり、新左衛門も、今は、せむかたなく、却りて、利休の職務に勉強することを感じけりこなむ。

三二 勉

強 その二

舊幕府の碁所に、井上幼菴といふものあり、圍碁の技、九段の業になりければ、そのよし、寺社奉行に届け出でたり、舊幕府の例にて、九段に至れば、五十人扶持を與へ、目見以上に列ることせり、幼菴のこの届のいづるや、宗家なる本因坊丈和は、幼菴か、かねてより、不和なりしかば、幼菴の、九段に成るを妨げむとて、その門人秀和といふものを申し立て、幼菴と手合の試験を請ふ、奉行よりは、手合を見合すべき旨、説諭を加へけれども、本因坊の申し立に、幼菴いまだ九段の技なきを、強ひて、申し立つる段、甚だ、不都合の至り申すべし、某門人秀和と手合の上、同等の位あらば、九段の届、御聞届ありたし、さもなくば、従來の成規たちがたきよし、申し立て

ければ、止むことを得ず、手合申し付くべしとて、一日、寺社奉
行の邸に、幼菴、秀和兩人を呼びいだして手合を命ず、二人
は一生の大事なればとて、前日より物忌して、神明を拜し、氣
力を養ひなごして、出席せり、奉行列座の前に於て、二人立
ちむかひて、黒白の石を取りたるは、實に、勇士の鋒を取りて、
たちむかひたるが如し、二人、心氣をこめて、うちけるが、そ
の日、三十五子を下して、日没に及びければ、猶後日、うち續く
べしとて、その日は退出せり、秀和、師家に至りて、本日の三
十五子を置きて、その師、本因坊に見す、師、これを見て、横手
を打ちて、喜色を顯し、『これにて結局二子の勝を生ぜり』とい
ふ、幼菴も家に歸り、同じく本日の三十五子を置き試みる
に、結局に至りて二子の負に至るべしと覺りて、歎息するこ
といふばかりなく、それより、飲食を忘れて、工夫を廻らせざ

蘇

も、二子の負に至るべきを、持ち直すこと能はず、いかにせむ
と心痛するほごに、再度の手合に出頭すべきよし沙汰あり、
こゝに、止む事を得ず出席して、結局までうちけるに、案の如
く、幼菴、二子の負こなれり、かくて、幼菴は、家に歸り吐血し
て、暫時、氣絶したりしが、やゝありて、蘇生したりといふ、こ
れより、幼菴は、ますます、奮發し遂に眞の名人となりて、碁所
の職にありけるよしなり、かれといひ、これといひ、その勉
強のほご、驚くべきことにあらずや、かゝる技藝だに、かく
のごとし、世間有用の業に従事するものよろしく勉強す
べきなり、

三三二 鶯雛學音

柴野邦彦

籠養小鳥者、捕獲鶯雛、患其聲澁濁、就老鶯善鳴者、使學其聲、俗

謂之附子。雛初在籠。遷躍上下。躁然無少頃靜。忽聞老鶯一啣。便戢翼凝立。如諦聽者。越時始能動身。既而低啣。如學之者。又如羞澁。怕人聞者。如此。一兩日。乃能放喉。縱轉音響。劉亮可愛云。嗚呼。微彼小禽。尚思好。其音而知希賢。可以人而不如鳥乎。

三三 格言四則

光陰如矢。歲月不待人。

由儉入奢。易由奢入儉難。

鸚鵡能言不離飛鳥。猩猩能言不離禽獸。

父母之年不可不知也。一則以喜。一則以懼。

三四 學問の功

貝原益軒

およそ人の不孝不忠諸の悪を行ひ、慾を縦にし、身を亡ぼし、家を敗るに至るは、何にか因れる、智なければなり、又善

を行ひ、家を興し、身を保ち、譽を得るは、何の故ぞ、智あればなり、智あれば、能く善のなすべきことを知りて、行ひ、悪のなすべからざるを知りて、行はず、この故に、智は、身の内の大なる寶なり、然れば、則、學者、當に、智を求むるを以て、第一とすべし、而して、その智を開くは、學問にあらざれば、成りがたし。

三五 學の要

貝原益軒

疑を人に問ふは、智を求むる道なり、自ら、心に道理を思ふは、智をひらく本なり、問ふことは、智を人に求むるなり、思ふことは、智を我に求むるなり、人に問はざれば、知る事、狭くして、心の迷ひ解けず、自ら、思はざれば、見聞く事、廣し、さいへども、道理を我が心に、深く、自得せず、この故に、問ふ

こ、思ふこの二つは、理を究め、智を明かにする道にして、學の要なり。

三六 人は萬物の靈長

福羽美靜

諺に、人は萬物の靈長といへり、まことに、天地間にあるもの、靈なり、長なり、ごり、げものも皆、各、心なきにあらず、しかれども、人の如く心のそろひたるものなし、心の揃ふといふ事は、智と徳との備はれることにて、昔の事を知り、後の事を思ひ、善き事を見習ひ、悪しき事に懲るゝ等をいふなり。

よき事に、さまざまあり、大なるよき事、ちひさなるよき事、また、人のためとなるよき事、わがためとなるよき事、又一方にはよき事ながら、一方にはあしと思ふよき事、かくのごとく、さまざまなるを、よく知りわけ、考へわくる等、これ、皆、智にして、人たるもの、たふさきところなり。

鳥、げもの、親を知れり、しかれども、忘るゝこと早し、人は、そのたくひにあらず、親を思ふことの切なるは、さらなり、兄弟、朋友にも厚く、師の恩を知ることもふかし、かつ、また、禮義といふことあり、約束といふことあり、敬ふべきをうやまひ、憫むべきをあはれみ、守るべきを守り、誇るはわろしこと知り、侮るは、すまじきこと、知れる等、これ、みな、徳にして、人の人たるところなり。

さはいへ、人は、學問が肝要なり、時計も、卷かざれば、鳴らざる如く、人も學ぶにあらざれば、智と徳とを活動せさずること能はず、また、學びたる後といへども、徳高き人に交りて、時々、よき事をきくべきなり、この事を怠るべきは、時計に

して、卷かざるご同じく、遂に、その活動もやむにいたらむ。

三七 源 義 家

青 山 拙 齋

源、義家從賴義東征、平賊而還。嘗詣關白賴通談征戰事。時大江、
匡房在座聞之。既而匡房退出、私言、渠有將才、惜未知兵法。義家、
從者竊聽而悲、待義家出而告之。義家曰、此必有故。追及謹請、遂
執弟子禮。及征武衡、方攻金澤城、見飛雁亂行、曰、是江帥所教、必
當有伏。分兵圍之、果有伏。遂擊敗之。
○學而不思、則罔思而不學、則殆。

三八 近郊の秋色

正 岡 子 規

朝日障子にあたりて、蜻蛉の影あたゝかなり、世の人は上
野、淺草、團子坂と浮かるめり、われも出でなむや、出でなむ、
病のつのはつものれ、待たばこて、出でらるゝ日の來るこ

師帥
太宰ノ帥
元帥

朝朝朝
暉暉日

人は出でた
りぞ出でた
る人こそ出で
たれ

木立
叢樹

こもあらばこそ、『車呼びて來よ』といふ、やがて歸りて、『車
は皆出ではらひたり、遠くに雇はむや』といふ、『さまでは、今
日の日和には、足ある人ぞまづ車にて出でたる』と笑ふ、一
時過ぎて車は來つ、車夫に負はれて乗る、成るべく靜か
に挽かせて、鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の
名も知らぬが、まづ目につく。
空忽ち開く、村々の木立遠近に連りて、右には千住の煙突
四つ五つ、黒き煙を漲らし、左は谷中、飛鳥の岡つゞきに天王
寺の塔聳ゆたり、見渡すかぎり、眉墨ほごの山もなければ、
平地の眺の廣さ、我が國にてはこれほごの處、外にはあらじ
と覺ゆ、胸開き氣伸ぶ、田は半ば刈らずあり、刈りたる
は、皆田の縁に竹を組み、そこに掛けたり、我が故郷にて
は、稻の實る頃は、田の面乾きて水なければ、刈穂は悉く地干

にするなり。この邊の百姓は、たごし水の味を知らざるべし。吾にはこの掛稻がいと珍らしく感ぜらる。榛の木にかけたるは殊に趣あり。その上より森の梢塔の九輪くわんなど見わたる、更に面白し。

路の邊に咲けるは、蓼の花ぞ最も多き。その紅の色の老いて、はげかふりたる中に、ごころごころ野菊の咲きまじれる様、ふるひつくばかりうれし。

我が車の響に、野川の水のちらちらと動くは、目高の群の驚きて逃ぐるなり、あないごほし。目高を見るは野遊のめあての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけて、いよいよいごほしさを増さるなる。

小鮒にやあらむ、すばやく逃隠れたる、憎し。たまたまに蛭

の浮きたるはなくもがな。

むかうより人力車來たり、見れば男一人乗りて、前に藁づさを置きたる、その端より黄なる實の漏れて見ゆるは蜜柑か、金柑か、一足、町を離るれば見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の残りたるは、あちこちにあり、一つくひたし、烏瓜の蔓に赤き實の一つだに残りたるを見ず、目高多き小川を過ぐ。

童二人、ごある門の内より『人力、人力』とわめく、諏訪神社の茶店に腰を休む、日傾き風俄かに寒くなりたれば、興つきて歸る。

三九 夜の村

一

子垂髻
供髻髮

慚暫漸
づく

霞の奥に日は沈み、

雲居の雲雀野末に落つ、

髻髮等去りて、

静けき小川、

今ぞかなづる夕の曲、

二

闇の幕漸く下り、

森を包み岡を蔽ふ、

洩るゝは燈火、

きこゆるは犬の聲、

今ぞ眠る夜の村、

四〇 採用試験

落合直文

ある商會にて、一人の見習店員を雇ひ入れむが爲に、新聞紙上にその旨を掲げて、『志願者はその定め日に、商會に來りて、親しく主任者の試験に應ぜらるべし』と廣告せる事ありき、その商會は名高きものなりければ、その道に志あるものは、われもわれも應じ來りて、その日の午前九時には、ある廣間に導かれ、そこに主任者の出で來らむを待てり、かゝる間にも心にかゝるは今日の試験なり、いかなる問をか起されむ、定めて、商業に關する智識、又は今後のわが目的なごにてやあるらむ、算筆はいふも更なり、地理や、歴史や、苟も商業に關するほどの智識は、皆藏めてわが腦裏にあり、殊にその目的に至りては、われにはかくかくの遠大なる目的あり、問はれなば、滔々として辯じ去らむなご、何れ

胸腦裏
中裏

も種々の空想を描きて待ちあへりき、
 やがて、かなたの戸の開くと共に、『主任なり』と名乗りて、年
 長けたる人、そこにあらはれぬ、こゝぞと思ひて、人々皆胸を
 跳らせ、さて、順次にその前に呼び出さるゝに連れて進み出
 てたるに、主任なる人は、いさ平然たるさまにて、別にこれぞ
 といふ問をもなさず、簡単に、年齢、郷貫、經歷など尋ぬるのみ
 にて、やがて事竟てぬ。
 人々皆不思議の思をなしてあるほどに、主任なる人は一同
 に對ひて、懇に今日の遠來の勞を謝し、『重ねてまた願ふこ
 ともあるべし』さて、その中より唯一人の年若き志願者を
 留め置きたるのみにて、他は皆歸したり、その若者は衣服
 も極めて粗末にはじめより片隅の方において、意氣頗る揚
 らざるものなりければ、人々はあざ笑ひ、『眼の無き主任者

かな』なごいひ散して出て行きぬ、その若者は遂に雇ひ
 入れられしが、主任者の見込は誠に違はず、その正直なるこ
 と、その勤勉なること、しかも物に機敏なること、實にいふば
 かりなし、かくて、その事務に慣るゝに連れて、才智はます
 ます發揮せられ、はては店中第一の有用なる人物となれり、
 他の店員も、そのはじめ、いかにも無造作なる主任者の試験
 なるよと思ひ居たりけるが、こゝに至りて、更にその眼力の
 ねそろしきに驚き、ある日主任者に向ひてその事を問ひぬ、
 主任者は事もなげに笑ひて、『我は、決して無造作なる試験
 をば爲さざりき、われ、まづ志願者の入り来る時より、かた
 への室にありて、一々彼等の舉動に注意せり、さて、われこ
 そ、いはむばかりに、各々胸突き出して、さも得意げに、つこ
 入り来る人々の中に、かの若者の舉動の、いかにもゆかしげ

なるは、早くもわが眼を射き、かの若者は、まづその入口にて、丁寧はその靴の泥を拭ひ、しこやかにその帽子を脱ぎぬ、これ既に彼の注意深き性質の知らるるにあらずや、彼はまた室に入りて後、あごより來りし一人の年長けたる人に向ひて、みづから立ちてその椅子を直しぬ、これ明にその丁寧にして、禮義に厚きことの知らるるにあらずや、かくて、余の間に對する彼の答は、まことに明瞭にしてしかも正確なりき、これ、その信ずるところの固きものあること、知らるるにあらずや、我は、又さきに、一冊の帳簿をわざと床上に落とし置きたりしが、かの多數の人々の中、何人もこれに氣附けるは無かりき、さるに、彼は室に入るに等しく、たゞちにこれを認め、やがて、人の注意を惹かぬやうに、そこそそれを机上に上げて、その塵をうち拂へり、また彼は絶えず

性
格
人
品

頭
點
肯
首

沈着の態度を保ちて、他の人々の如き喧噪の風をあらはさざりき、われはまた、彼の衣服の粗末なるにかゝはらず、よく始末せられ、その靴はよく磨かれて、少しの汚點をも留めざるを認めたりき、凡そ、これらの事は以て彼の性格の、いかにゆかしき事を證して餘りあるにあらずや、わが彼を採用せしは、即ちこゝなり、かくて、その結果は諸君の知らるゝ如し、抑々人の性格は、常に一舉一動の中にあらはるゝものなれば、諸君も平生心してその上に十二分の注意を拂はざるべからず』といひしに、店員は皆げにもこ點頭きたりごぞ。

四一 銀行に入りし少年に

竹越與三郎

肅啓 御狀披見、多年御勉強のかひありて、全科御卒業成さ

れ、かつ某銀行より招聘を受けられ候由敬承致候、小生迄も欣然の感有之候へば長年御辛苦なされ候御兩親の御悦如何かご想像せられ候、茲にロスチャイルド家創業の主人が其の實驗より得たる智慧なりとて其の一家の少年少女に讀ましむるは勿論、其の銀行の壁上に大書せるものなりとて持囃さるる座右の金言見當り候まま物に代へて供費覽候

瑣末細

- 一 事務を執りては瑣末なる事までも仔細に吟味すべき事。
- 二 萬事に敏捷なるべき事。
- 三 熟考は長く決斷は速にすべき事。
- 四 勇往奮進、決然として進むべき事。
- 五 困難を忍耐すべき事。

誠實

- 六 人生の競争に勇なるべき事
- 七 誠實をば神聖なる者として守るべき事。
- 八 商賣上殊に虚言を吐くべからざる事。
- 九 無用の交際を爲すべからざる事。
- 十 有るを有るごして、有りもせぬ風を粧ひ飾るべからざる事。

償還

- 十一 借りたるものは速に償還すべき事。
- 十二 機に臨みては金錢を一擲するの道を知るべき事
- 十三 勁烈の酒を絶つべき事。
- 十四 時間を善く用ふべき事。
- 十五 運に依頼せざる事。
- 十六 何人に對しても慇懃なるべき事。
- 十七 決して失望すべからざる事。

慇懃

十八 刻苦勉勵すれば必ず成功すべしと確信する事、
兄英語に達し、志望極めて高し。此等の文字を見て、定めし
區々の老婆親切と一笑せらるゝならむ。然れども東坡も、
孔子の道を評して『匹夫匹婦も言ふべくして聖賢も行ふ
事難し』と被申候。最も高尚なる道は最も平明なるもの
に候。何卒此の格言に基づきて、御成功あらむ事切望に堪
へず候。来る日曜日の午前には是非御入來下され度待ち
上げ申候。匆々

四二 富 貴

本居宣長

世々の儒者、身の貧しく、賤しきを憂へず、富み榮ゆるを喜ば
ざるを、よきことにすれども、それは、人の誠の心にあらず、多く
は、名を貪る例の偽なり。まれくに、さる心ならむ者あり
ごも、それは世のひが者にこそあれ、何のよき事ならむ。理（こと）
ならぬ振舞をして、あながちに、願はむこそは悪しからめ。
程々に勤むべきわざをいそしく勤めて、なりのぼり、富み榮
へむこそ父母にも、先祖にも孝行ならめ。身衰へ、家貧しか
らむは、上なき不孝にこそありけれ。

四三 眞の勇者

那珂梧樓

争を好むは、勇にあらず。眞の大勇は、人ご物を争はぬもの
なり。中納言、伊達政宗の家に、原田左馬助とて、武勇雙ぶも
のなき士あり。其の頃、政宗、後藤孫兵衛といふ剛のものを
かゝへられたり。或日、孫兵衛、途にて、左馬助に逢ひ禮を施
せるに、左馬助は何事か思ひ居たりけむ。答禮をもなさて、
行きすぎける故、孫兵衛、大に憤りて、その後は左馬助に逢ふ

振舞は心得
すの振舞ぞ心得
ぬの振舞こそ心得
ねの振舞こそ心得

詔 滔 滔 滔 滔 恥 辱 羞 慚 愧

毎に、無禮の事のみ多かりけれども、左馬助は少しも尤めず、うち過ぎたり。政宗、これを傳へ聞きて、孫兵衛の振舞こそ心得ね。速に暇を取らせむとて、左馬助を召し、その由を告げれば、左馬助諫めて、『某は不肖なれども、今、士大將の任たれば、御家人の中には、某が髭の塵を拂はむと謀る者こそ多く候へ、いかで、孫兵衛の如き剛直の者これあるべき。抑も、勝れたる武功は剛直の士に非ざれば、成しぬぬものに候へば、唯、その儘に召し使はるゝやう、あらまほしく候ふ』とて、ますます、孫兵衛をよく遇したり。

孫兵衛は、その事を知るべくもあらねば、左馬助のはじめに似ず、よく遇するを見て、かゝる詔者を生けて、たかむは、伊達家の恥なり。斬りすてむとたもひつめて、左馬助が家に往き、對面を請へるに、左馬助は何心なく、出でむかへて、これを

爐邊に請するに、孫兵衛一禮にも及ばず、『汝、先日の無禮をば、よも忘れはすまじ、覺悟せよ』と、爐上にかけて置きたる、湯釜を取りて、投げつけ、短刀に手をかくるを、『左馬助、まづ靜まられよ』とて、その手を押へて動かさず、孫兵衛愈怒りて、『詔者め』といひつゝ、組み付かむとするを、取りて押へ、聲を勵まし、『今、我々二人貫きあひて、死にたらば、伊達家にて、武功の勇士は、外に誰かある。主のために、かばかりの怒を、忍びかぬる汝は、思はざりき』といひければ、孫兵衛始めて悟り、『實に尤なり。汝は、ごくより、此處に、心づきしよな。さては、我にまさりて、士大將の器量ありける者を、今まで、無禮せしは、過なり』とて、その後は、兄弟の如く、交りきこぞ。

この事、たゞ、皇國のみならず、支那戰國の時、趙の國に、廉頗といふ將軍あり、その頃、藺相如といふ人、秦に使して、功

ありければ、遽に上卿になりて、位、頗の上にありしゆゑ、頗、憤りて、『われ、趙國の將となりて、攻戰の大功ある事、擧げて數ふべからず、然るを、相如は、たゞに、辯口を以て、わが上に居る、ここ心得ず、かつ、彼は、もご賤しき者なるに、我、その下にあるは、これに過ぎたる恥なし、今より後、彼に遇はゞ、必ず、辱めむ』といへり、相如、これを聞きて、その後は、つねに、頗を避けて、彼の朝する時には、病ありて、出でざるが、ある時、他に往きたるに、頗が、彼方より來るを見て、俄に、避け、匿るゝを、從者、止めて、『かれは、君を誹りたる者なるに、君彼を見て、匿れたまふは、勇なきに似たり』といへば、相如いはく、『われ、先に、強秦に、使して、その王を朝に叱したる程なり、われ、驚下なり、雖も、何ぞ一の廉將軍を畏れむ、然れども、彼も一世の豪傑なり、願ふに、秦の強きを以てして、も、敢てわが

趙國に逼らざるは、吾等兩人のある故なり、然るを、今兩雄共に鬪はゞ、勢、必ず、俱に全かるべからずして、國の敗亡、目前にあらむ、わが頗を避くるは、國家の事を先にして、私の讎をば後にするなり』といへり、

頗、これを傳へ聞きて、大に羞ぢ、『これにて、我を撻ち給へ』と、背に荆を負ひ、相如の家に往きて、罪を謝し、終に兩人無二の交をなし、互に力を戮せて、事を謀りしかば、趙國、愈、堅固なりきとなり、

○大知大勇、必能忍、小耻、小忿、(鶴林玉露)

○暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也、必也、臨事而懼、好謀而成者也。(論語)

四四 題蘭相如奉璧圖

安井息軒

祖先
肉祖
左祖

後後午後
悔母後妻

眇然小丈夫而已矣。力不足以維雞貌，不足以加人。而英氣一發，滿堂愕伏。以秦王之暴，不得少折其節，終完璧以還，甚矣氣之能伸萬物之上也。然氣生於志，志奮於義，義苟失矣，匹夫猶且侮之。安能逞於虎狼之秦哉？相如唯知此義也。故他日屈於廉頗，如四體無骨，亦能使頗肉袒謝罪。而趙國賴以安。世之悻々者，獨知其折秦而不知其所以能折之，則別有在焉。抑末矣。

四五 閔損單衣

周閔損，字子騫，早喪母。父娶後妻，生二子。衣損以蘆花絮，所生子衣綿絮。損孝心不怠。父當冬令，損御車，體寒失鞞。父責之，損自理。父察知之，欲遣後母。損啓父曰：「母在一子寒，母去三子單。」父善其言，母亦悔，改待三子均平，遂成慈母。（日記古事）

四六 醜女說

藤澤東咳

厄介
世話

里之女子，容甚醜。行年三十，不售焉。問其領，則蟾蜍；問其齒，則瓠犀。盼目倩笑，而螻首蛾眉。信如此，殆盡美矣。然謂之醜，何也？曰：其鼻缺而呀然，夫鼻之隆起，面上或譬之山。今缺之，衆美廢矣。不啻容已行，亦有之。其惟孝乎？人之高行也。

○揚子雲曰：事父母，自知不足者，其舜乎。

○孔子曰：君子求諸己，小人求諸人（求ハ誅也）

四七 獨立心

福澤諭吉

獨立とはすべて他人の厄介にならず、自分の力に衣食し、わが思ふ所を言ひ、わが思ふ所を行ひ、心に恥ぢず、他に屈せず、大事に臨んで節を枉げざるは勿論、一言一行も等閑にせざるを云ふ。一時の方便の爲に止むを得ずして、右すべきを左し、東すべきを西するが如きは、獨立の精神に背きて、君子

主義

躊躇
依違

の愧づる所なり、
 斯くいへば、人間の行路は至極窮屈にして、ごても打解けて
 人に交るごともなるまじきやうなれごも、實際は決して然
 らず、抑々ここにいふ獨立ごは、外面に裝うて身の飾に用
 ふるものにあらず、唯深く心の底に藏めて自ら守るまでの
 主義にして、その心の寛大なるは、大海の物を容るるに異な
 らず、人に向つて多きを求めず、人は人なり、我は我なり、人
 の來りてわが獨立を妨ぐるにあらざれば、悠々ごして交る
 ごご甚だ易し。
 獨立は生命より重し、これを妨ぐる者あらば、滿天下の人
 をも敵ごすべし、親友の交をも絶つべし、骨肉の情をも
 去るべし、斷じて躊躇すべからず、されご實際には決し
 て斯る劇しき場合はなきものなり、例へば封建の時代に

覺悟
決心

武士が兩刀を帶したるは、天下の人を敵にして、無禮者は誰
 彼の別なく斬つて棄てむごの覺悟なりしかごも、仁義を重
 んじて武士道を守る限は、柄に手を掛くる必要もなくして、
 何十萬の武士が、何百年の月日を無事に過ごしたるが如し、
 當時の天下に鄙劣なる者も多く、無道なる者も多かりしか
 ごも、その者が武士に向つて無禮の行なき間はこれを許し、
 互に往來して、曾て自由の交際を妨げず、唯眞實の武士は
 獨り自ら武士道を守りしのみ、今の士人も、その獨立の法
 を、昔の武士の如くにして、大なる過なかるべし、

四八 カーネギー(二)

倫敦デーリー・ニュースの記者、嘗て、米國の大富豪アンドリ
 ユー・カーチギーに問ひて曰はく、『人若し赤手巨萬の富を

極貧
赤貧

作らむと欲せば、如何なる資格か最も必要なる』と、カー子ギー言下に答へて曰はく、『第一は貧家に生まるゝことなり、銀の匙もて飲食するものは、到底富豪たる資格なし、極貧極苦に身を曝し、死活を争ふの窮境に立ち、残酷さながら狼の如き貧乏に追はれて、一切家庭の和樂を咬み破られ、一家離散の慘狀に陥り、如何にもして、此の狼を追ひ拂はむ、この大決心を奮ひ起すものにあらざれば、到底富豪とはなり得べからず、人間此の境に臨んで、始めて其の全能力を發揮し得べきなり』と。

實に、カーネギーの幼年時代は、慘憺極まれるものなりき、カー子ギーが十一歳の時、一夜遅く、父は外より歸り來たりしが、顔には血の色もなく、ぐたりと椅子に掛けながら、其の妻に向かひていふやう、『今日も一日駆け廻りたれど、仕事

所詮
結局

はなかりき、偶あれば、到底勞力にも引き合はず、これにては、所詮一家も支へ難ければ、子供とも相談の上、何とぞ始末せざるべからず』と、此の様子を目撃したるカー子ギーは、子供心にも、悲哀痛傷の情に堪へず、此の時より、命限り根限り働きて、貧の神を我が家の戸口より逐ひ拂はむ、と決心したり。

カー子ギーの家はもと機屋にして、手織機數多据ゑて、相應に營業したりしが、機織器の發明のために、追々衰微の悲運に陥り、一家四人飢饉に迫りて遂に身代を疊み、故郷を後にして、天涯茫茫たる米國に航せり、かくて、僅かなる知邊を便りに、ペンシルバニア州のピックバーグに落ち著き、カー子ギーは、翌秋より、一週若干の給料にて、同處の木綿工場に雇はれたり、仕事は絲捲にて、朝は日出前より、夜は日没後

飢寒
知邊
知人

汽罐
詰

まで、晝飯後四十分の外休憩の時なく、宛然機械の如くに役せられたれども、カー子ギーは心に決するところありければ、少しも意こせず、熱心にその職務を行ひ、翌年は擢んでられて汽罐の火夫となりぬ。こは十三歳の小童に取りては、頗る大役なりき、火の焚き方、水の注ぎ方、少しにても注意を懈らば、工場の大機械は忽ち調和を失ひて、微塵に破壊すべし。されば、流石のカーネギーも全身の神経をこれに集めて、夢寐猶安んぜず、夜半俄かに床より跳ね起きて、汽罐の熱度計を視る態を爲したるこゝ屢なりき。

四九 カー子ギー (二)

喜悅
歡

火夫の職も無事に務めて、翌十四歳の時、市の電信局の信使となり、カー子ギーの此の時の喜悅は、比するに物なく、

苦境
窮

『地獄より極樂に轉じたる思ありき、』といへり、彼は信使たる傍、零碎の餘暇を利用して電信の技術を學び、二年を経て、技手となりぬ。當時、米國全体の電信局中、單に耳によりて電文を解し得る者は、カー子ギーの外に只一人のみなりき。以つてその熟練を知るべし。カー子ギーが、その立身の登龍門ともいふべきスコットの會社と關係の縁を結びしは、實にこの電信技手の時代なりけり。カー子ギーが、幼年時代に於けるかかる慘憺たる苦境の中にも、流石に多少の慰藉はなきにあらず。彼が母は、敬虔にして慈悲深き性なりしかば、蜜の如き甘き慰藉と、光の如き力ある獎勵とは、綿の如くに疲れ、呼吸も絶へ絶へにて工場より歸り來たるカー子ギーをして、翌朝は、旭の如き希望を以つて勇み躍りて、再び工場へ駆け向はしめたり。

今一つの楽しみは、忙中の餘暇を讀書に費すことなりき、彼は幼少より、叔父に就いて讀書を習ひ、母にも奨められたれば、かかる苦業中にも、讀書の楽しみを變ぜず、當時、市にアンダーソンといへる人ありて、その藏書を無料にて借覽せしめしが、カー子ギーは其の最も熱心なる借覽者なりき、アンダーソンに對するカー子ギーが深き感謝の念は、到底我等の想像し得べきにあらず、カーネギーが今日、其の巨大なる寄附金の大部分を圖書館に投ずるは、當時受けたる讀書の利益といふ深き印象と、恩人アンダーソンの陰徳とを、永く記念する爲なりといへり、

業務に忠實熱心なることは、執業者の成業に最も缺くべからざる事なれども、業務の餘暇を自己の進歩のために用ひざるものは、遂に大成功を遂ぐる能はず、カーネギーの如

困憊
疲勞

海外
異域

心す
注意す

意外
案慮
考慮

きは、困憊極りたる僅かの時間をも利用して、進歩の原動力を、貴き讀書に用ひたるものといふべし、

五〇 輸出品の荷造につき注意を與ふ

一書呈上致し候、海外に輸出すべき貨物は荷造に最も注意を要し候事今更申すまでも之なく候へども、元來本邦より輸送致し候貨物は荷造の不完全なるため、往々少からざる迷惑を生ずることこれあり、吾人の十分十二分にも心すべきここに候、

荷造の不完全なるため、赤道直下通過の際、貨物によりては意外の變質を來たし候ものも之無きにあらず、氣候の變化、乾濕の如何等は荷物上にも大いに顧慮すべき問題に御座候、若し貨物の品質に異狀を呈したるため、到着先にて

その用途を失するが如き事あらば、申すまでもなく不都合の事に候ゆる、荷造の際には貨物の大小容積重量は勿論品質に應じても適當の御配慮あり、決して不都合これなき様御注意肝要に存じ候。

一定の荷造法あるものは固よりその規定に従ふべく、さる規定なきものにては深く御注意これありたく候。今回の御荷造に關し、聊か思ひあたりも之あり、念のため御一報申上げ候。

五一 新製漆器を觀る記

成島柳北

一刀にて萬象を彫鏤し、奇幻精妙、看客をして驚歎せしむるものを、誰ぞかする。わが友、堀田瑞松子その人にあらずや、瑞松子の東京に来るや、漁史はじめ、その妙技に驚歎し、文を

作りて、これを江湖に紹介せり。これ、漁史は、ひそりその技を喜びてのみにあらず、その人の俊爽なるを愛してなり、その人の大志あるを畏れてなり、客年、瑞松子は、巍々たる巨室を山城町の八番地に築けり、漁史竊に疑ひ、問ひて曰く、『子は將に何をかせむとする、子の技や、一小書齋にて足らむ、何ぞこの巍々たるものを要せむや』と、瑞松子いはく、『先生唯余が彫鏤の技あるを知りて、いまだ、髹漆の事に熟するを知らざるか、今や、わが國産の海外に輸出すべきもの、甚だ、多からず、漆器はわが國に最も、名あるものなり、然るに、工人その製造を粗にして、その虚飾を巧にす、されば、わが漆器の聲價、日に、下らむとす、余よりて、これを救はむとするに、環堵の室、豈、數百口の工夫を養ひ、數千箇の器具を容るゝに足らむや、先生

試に一臨して、余がする事を観よ』と、漁史往かむと思ひて、いまだ果さざりき。

然るに、わが社の偵人、來り報じていはく、『太政大臣三條公、公然駕を堀田瑞松の宅に枉げられたり』と、漁史また疑を起していはく、『瑞松子は何を求むる事ありて、大臣を、その宅に迎へたるか、必ず故あらむ』と、やがて、その實を聞きしに、漆器の製造日に盛大に進み、陸續海外に輸出せられ、その聲價頗る、高きが故に、三條公は、その一大國益たるを嘉稱せられ、みづから、その工場に臨み、詳細に、その製品を觀覽し、愈、前途、勉勵して、倦まざらむことを、希望せられたりといふ、こゝに、漁史兩回の疑を氷解し、往きて觀ることの晩かりしを悔い、いそぎてその家に赴き、製造せる器物を點檢せしに、他の漆工のなせるとは、大いに、異なるものあり、その器、皆

燦然
燦爛
玄玉
玄米

審査
大審査
不審
院

黒漆を塗りて、研き出だし、蒔繪も皆黒色にて、毫も華色を施さず、細かにこれを觀れば、その圖章は、燦然として、瑩然として、極めて精しく、極めて巧に、殆、玄玉を彫琢したるものゝ如し、瑞松子、漁史に語りて曰く、『余の最も、注意する所は、外面の漆色、繪畫のみにあらず、その木質を精選すること、構造の堅牢なることにあり、もし外國の工人をして、その漆を剥ぎ、その原質と結構とを審査せしめば、必、余が工事の、他に異なるものあることを知らむ』と。

嗚呼、その外を華麗にし、中を粗笨にするもの、滔々たる天下の奸商、みな然らざるはなし、吾人はかゝる奸商が、一日も速に、その跡を絶ちて、國家のために忠實なる良商の續出せむことを望まざるを得ず。

五二 工人及び商人

資本

負債

工業に従事する一切の人を工人といふ。之を分ちて企業主、補助員、職工とすを得。企業主は自ら資本を出し、その工業上の損益と経営上の責任一切を負ふものにして、補助員若しくは職工の過失は勿論、市場の景況による損失などはみなこれその負擔となるなり。

補助員職工に至りては、企業主に雇はれて一定の報酬を受くるものにして、普通營業の成績擧否の如何は直接關係を有せざること多し。

企業主は一私人なることあり、團體なることあり、團體なる場合にも、普通の會社組織なること國家又は公の團體なることあるなり。

指揮

補助員は、普通頭腦を働かせて業務に従事するもの多く、その業務を指揮し又は監督する人、或は各種の技師工場長の如きもの、若しくは會計、原料買入、製品販賣等に従事するものを指すなり。職工は多く手足の勞を供し、他の指圖に従ひて立ち働くものをいふ。

次に、商人とは商業を營む者なり。されど、法律によれば、商人とは自己の名を以て商業を營む者に限るが故に、番頭、丁稚、小僧などは商人と云ふ程にあらず、主人に使はれその業務を助くる使用人なり。

我國には、古來年季奉公の制あり、年少の頃主人の家に同居し、一定の年限を精勤したる者は主人より暖簾を分たれ、または通勤番頭として永く主家に勤め、あたかも家族の如き關係ありしが、今は其の風漸くすたれ、僅かに商家の一小部

分に行はるるのみなり。使用人を分つて、支配人、番頭および手代その他の使用人とする。

支配人は使用人中最上級に位し、その商業上に關する一切のことにつき主人に代はる權利あり。されば、主人は支配人を置きたるべき、または解雇したるべきはこれを裁判所に届出でざるべからず、主人と支配人の關係かくの如くなれば、自己竝に主人以外の人のために商業をなすことを禁ぜらる。番頭および手代は支配人の下にあるものにして、主人より特に命ぜられたることに ついてのみ主人に代りて取引をなすことを得るものなり。番頭と手代とは法律上にての權利は同じきものなれども、習慣上番頭の方手代の上に立つが如し。その他、使用人は小僧、丁稚など、主人、支配人の命を受けその手足の如くなりて働く者はい

ふ。

凡そ主人又は企業主が職工その他の使用人を雇ふにあたりては、その性質、學問および履歴などを細かに取調べ、適當と認めたるべきこれを雇ひ入れ、その技倆に應じて適當の仕事を行なさしむべし。然らざれば、各事業の成績擧らずして衰微の基となるべし。殊に常々使用人を愛撫し、徳を以てこれを懐け、常にその務め振りに注意し、相當の獎勵法を設けて、誠實にして勤勉なる者、又は熟練せる者を優遇するはこれ雇人のためにして、またその事業のためとなるなり。使用人及び職工は、第一に従業先を選択し、一旦従業したる上は、誠實と従順を旨とし、自分に命ぜられたる仕事は責任を以てこれに従事し、全力を傾けて之を遂行し、度々主人を替へ職を轉ずるが如きことあるべからず。報酬の多少、

不眞面目
不忠實

待遇の良否等につきて不平を唱ふるは、不眞面目なる使用人の常にして、こは最も慎むべきことなり、たこへ待遇意に充たずとも、これ己が勤め方の足らざるが故と思ひ、自ら省みて一層精勵すべし、『勉強は幸福の母なり』と古人もいへり、注意すべく味ふべきことなり。

五三 協同一致

徳 富 蘇 峯

予は、嘗て、伊太利の塑像師が製作したる五六歳の小童と、小女とが相與に、水鉢の一端を推して、これを傾けつゝある塑像を見たりき、その下に題字あり、曰く、『合すれば強をなす』と、余は、また、途上にて、しばく、二人の車力が偶然、ある坂下に出會して、互に、相推し、相助けて、やすく、こ、二個の車臺をば、順次に、坂上に運ぶを見たりき。

泰山の安き
に置かむ
磐石の安き
に置かむ

衰頹
陵夷
興隆
盛

これともに、われらがよき教訓にあらずや。

五四 自治の精神

添 田 壽 一

自治の精神は、大に修養發揮せざるへからず、この精神は、實に國家を泰山の安きに置かむ基礎たり、地方自治の制度にして、其の精神健全鞏固ならざらむか、一朝不幸にして中央政府の變動、内閣の更迭頻繁ならむとき、國家の基礎は動搖極りなく、遂に非常の大難を醸さむも知るべからず、佛國の如き、内閣の更迭頻繁なるも、國家の基礎根軸たる地方自治の確乎たるがために、國家の本體は毫も動搖することなく、又露國の如き、専制にして國土擴張のために兵馬恣惚、外國と交戦するを國是とせざるも、猶其の村落制度の意外にも完備せるが爲に、國勢の衰頹せずして、益々隆盛を致す

培養

形跡

に觀るも、如何に自治の精神の必要なるかを知るに足らむ。我が國自治の制は往古よりあり、孝徳天皇の御宇、里長及び五人組の制度既にその萌芽を生じ、漸次發達して、莊園鄉村名主庄屋組頭の制となり、自治の精神大に涵養せられたり、此の制度、明治維新に際し、他の制度と共に痛く破壊せらるるに至りしかども、戸長區長等の設ありて、猶幾分の形跡を留め、遂に市町村制の發布に遇ひ、新區域を以て自治團體を組織するところはなれり、然れども、新制實施以來、歲月を経るに多からざるが故に、未だ大に自治の精神を發揮するに至らざるは、極めて遺憾なり、抑、現行の市町村制は歐洲自治の制に則り、頗る完全なる法律なり、雖も、この法律を運用すべき自治の精神にして備らずんば、恐くは完全なる効果を收むること能はざらむか、故に市町村の住

利用

區域

結局

民たるものは、互に自治の精神を養成し、今後十分に自治制を利用することを勉めざるべからず、自治體の効果を現すべき點は、主として、住民の有形無形上の利益幸福を増進するに在り、これを喩ふるに、恰も一家共同して家事を経営するが如し、即ち自治體は、唯一家生活の區域を擴張したるに過ぎざるなり、故に自治體の要旨は共同和合の精神を以て經濟上の業務を簡約懇切に處理するに外ならず、例へば下水掃除の如き、己獨り能くこれを勉むるも、隣人之を共にせざるときは、下水の疏通得て望むべからざるが如し、住民相互共同の必要なるは、多言を要せずして明なり、自治體の精神が果して自己の業務を自ら處理するに在りせば、自治吏員は、政府官吏の如く、報酬の多きを望むべからず、自治體に名譽職なるものあるは畢竟これがための

み。又自治の吏員は、その委託せられたる業務を自己の業務と思惟し、意を用ふることに周到に、事に従ふこと懇切にして、些少の費用を以て、能く事務を舉行し、その職に在るを名譽として、その執務に勉強し、以て自治の制度をして有益に活動せしめざるべからず。然らざらむには、空しく自治の名は存すとも、毫も實益を生ずることなかるべし。

試に外國の實況について、自治制の妙味を示さむか。英吉利は自治の精神に富める屈指の國なり。その一小都邑すら、水道、下水道、道路、點燈等の事業に意を用ひ、水道、下水には、鐵管を埋め、道路には、木石を敷き、點燈には、瓦斯を用ふるにより、流行病の發生傳播なく、雨にも泥に歩するの不便なく、暗夜も晝の如き觀あり。特に市場を設け、ここに至れば如何なる日用品もたやすく廉價にて購ふべく、富豪の妻女も出

傳播

廉價
潔淨

でてその需用を充足するの便あり。或は商品交換所を設け、更に整ひたる處には、圖書館、奏樂堂の設けさへ備れり。而して、此等は皆自治體の經營に屬し、その財産收入又は使料を以て、これが經費を支辨する計畫なれば、住民租税の負擔は比較的、苛重ならざるなり。

ビスマルク公の如き、宰相の大任と村長の職務との間、曾て輕重したることなかりきといふ。斯くの如きは、畢竟自治體の業務を以て己の家事の如くに重んじ、自治吏員となるを無上の名譽としたるに由るなり。

要するに、自治の精神にして十分に養成せられず、完全に發揮せらるゝことなくんば、たとひ法令機關は如何に善を盡し、美を盡すとも、民は其の妙味を感ずることなくして、その恩澤に浴すること甚だ僅少なるべし。

五五 山の美

志賀重昂

一、山と雲

唐人巖を雲根といふ、趣あるかな言や、雲も山より出づ、しかも山雲を得て、益、その美を加へ、愈、その大を添ふ、試みに山前に立ちて、その山態雲容の極りなき變幻を觀よ、先づ縷々として、藕絲の如き雲の、徐ろに山の腹背に曳くを見む、神女の羅裳を織るといふも猶その清艶の趣を盡すに足らず、忽にして雲の來往急に、澎湃として天を捲くを見む、山、その間に或は湧き、或は没し、或は浮び、或は沈まむ、かの洋々たる大海の上、點々たる島嶼の羅列せるも、猶この趣に比するに足らざるを覺ゆむ、やがて空氣の運動靜穩に歸するや、雲は漸く下降して山腹に集り、獨り山頂の峭然

清艶

羅列

頃頂

として半空に屹立するを觀む、莊嚴の氣、ここに至りて侵すべからず、要するに、山は雲を得、雲は山に遭ひて、互に益、その美を増し、その奇を添へ、益、その大を煥發するなり、

二、山と水

水、山に在りてその美益、美に、その奇益、奇なり、平面世界に在りて見るべからざる水の趣は、山に在りて始めて之を認むるここを得べし、

水の最も晶明なるもの、最も平和なるもの、最も藍靛なるものは、山中の湖之を盡せり、水の最も激烈なるものは、山陰の瀑之を盡せり、水の最も清冽なるもの、最も可憐なるものは、山間の溪水實に之を盡せるにあらずや、

凡そ、水の睡り怒り笑ふ趣は、山に入るにあらずれば之を見るべからず、而して、巖は水を受けて緑潤となり、水に留

まれて、その奇態怪状を現出す。要するに水の美、水の奇は、山に遇ひて始めて大成し、巖の美、巖の奇は、水を待ちてここに完成せらる。

五六 翡翠

南方書佐

翡翠は小禽の美麗なる者なり、好みて溪澗幽邃の地に棲れ、蓋、閑雅君子に似たるあるか、予山陰に家す、窓前に一の小池あり、奇巖老樹、頗る幽趣を成す、因りて、小鯉數十尾を池中に放ち、以てこれを畜へり、一夕、窓をひらきて坐せしに、翡翠來りて、疎柳の梢に止りぬ、予大に喜び以爲らく、園池一段の風致を添へたりと、翌晨いで、池に汲みぬ、忽ち翡翠水を蹶りて起り、これを見れば、背に一赤鱗を啣む、予驚きてこれを撃て、ごも及ばず、よりて池中の魚

含啣

を點檢せしに、すでに、十數尾を亡ひたり、蓋、人なき時を窺ひ、これを啣み去りしならん、何ぞ圖らん、閑雅君子にして、此竊盜小人の行あるや、乃ち羅を池上に張り、以てこれに備へぬ、而して翡翠復、來らざりき、夫れ、貌を以て人を取る、聖人猶これを子羽に失へり、詩に曰く、彼の子その服に稱はずと。

五七 相摸灘の落日

徳富健次郎

秋冬、風全く風き、天に一片の雲なき夕へ、立ちて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず、日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで三分時を要す、初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山、烟の如く薄し、

紛爛漫々

白光爛々として眩しに、山も眼を細うせるにや、日更に傾くや、富士を初め相豆の連山、次第に紫になるなり、日更に傾くや、富士を初め相豆の連山、紫の肌に金烟を帯ぶ、この時濱に立ちて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、ころがりたる生簀籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃ゆるはなし、かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待するの感あり、莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に在るを覺ゆ、物あり、融然として心に浸む、喜と云はむは過ぎ、哀れと云はむは未だ及ばず、已にして日愈々落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず、唯富士の嶺舊に仍つて紫の上

更に金光を帯ぶるのみ、伊豆の山、已に落日を銜み初めぬ、日一分落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く、日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く、已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘡せて點となり、忽にして無し、眼を上ぐれば、世界に日なし、光消えて、海も山も蒼然として憂ふ、日は入りぬ、而も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空、金よりも黄なるを見ずや、偉人の歿せる後、實にかくの如し、日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燦りたる樺となり、上りては濃きプロシヤ藍色となり、日の遺藥とも思はるる明星の、次第に暮れ行く相摸灘の上に眼を開きて、明日の日の出を約するが如きを見るな

り、

五八 軍艦の種類及び任務

軍艦は、海軍を組成する要素にして、その任務も、亦海軍の任務を分擔するにあり、今軍艦の種類、及びその任務に就きて大要を説明せん、

第一、戦艦 戦艦は、専ら戦闘に従事する者にして、海軍力の中堅を組成するものなり、故にこの艦は十分なる攻撃力と防禦力を備へ、且凌波性と遠航性を有せざるべからず、

第二、巡洋艦 戦時に際しては、敵の商船運送船等を掠奪し、若しくは破壊し、或はこれらの諸船を護衛する軍艦を攻撃するを以つて任務とす、されば、戦艦の如く、巨大なる攻防

力を要せざれど、快走力を有し、且凌波性と遠航性を具備せざるべからず、而して、この艦は、ひこり戦時に於て必要なるのみならず、平時に在りても、海上の警戒、犯罪者の逮捕、監督等に最も適するが故に、近年その製造、漸く多きを見るに至れり、

第三、海防艦 海防艦の任務は、自國の海岸を防禦し、又は、敵の海岸を自在に運動して、その砲臺軍艦を破碎し、或はその港灣を封鎖するにあり、この艦は、洋上に於ける任務に於ては、戦艦に如かさざれども、戦艦の到るこそ能はざる淺き海岸に出没して、自在に防禦若しくは攻撃するを得る長所あり、

第四、通報艦 通報艦は、敵状を偵察し、若しくは長官の命令を傳達するに用ひらる、されば、第一にその形體を輕小に

して快速力を有せしめざるべからず、又つとめて重量を節減して運動の自在と遠航性を有せしめざるべからず、第五、砲艦 砲艦は専ら沿海に使用する一種の小艦にして、任務上よりいふ時は、當に海防艦の一種と見て可なり、即ち戦時にありては、敵の砲臺及びその砲臺を掩護する軍艦を攻撃し、又は來襲する敵艦を防禦するを務めし、平時にありては、領海を警戒し、或は沿岸を巡邏するを務めす、第六、水雷艇 水雷艇は、頗る砲艦に類せり、ただその異なるところは、形體の極めて輕小なること、水雷を以て兵器の主要なるものとなすこと、又非常なる速力を有すること、にあり、水雷は、極めて猛烈なる武器にして、巨大なる戦艦も、その一撃に逢へば直ちに粉碎せらるゝなり、第七、潜航水雷艇 潜航水雷艇は、水雷艇の一種にして、最近

の發明なり、始め佛國にて製造せられ、米國、英國以下各國これを採用せり、船體を水面に現はさずして、敵艦に肉薄するを得るをその長所とす、第八、水雷母艦 水雷母艦とは、水雷、石炭、食糧等を水雷艇に供給するを以て、任務とせる艦艇なり、蓋し、水雷艇は、構造狹小にして、一時に多量の水雷、石炭、食糧等を積載すべき餘地なきが故なり、水雷艇隊を組織する場合には、必ずこの母艦なかるべからず、第九、水雷驅逐艇 水雷驅逐艇とは、敵の水雷艇を攻撃し、又は追撃してこれを破壊するを任務とする艦艇なり、されば、驅逐艇は、水雷艇に勝れる速力と攻撃力を有せざるべからざるは論を俟たず、わが水雷艇を誘導指導して、敵艦を攻撃せんがために水雷發射管をも具備するを要するなり、

第十、練習艦 練習艦は、海軍軍人に學術技藝を練習せしむるため用ふるものなり、初めより練習艦の目的を以て製造することなきにあらざれども、多くは艦船を改造してこれに充つるなり、

以上の外、戦時に、兵員軍馬糧食等を運搬して、軍艦若しくは陸上軍隊の需要を供給する船舶を要す、これを運送船といふ、運送船は、主として戦時に必要なるものなれば、通常別にこれを備へず、多くは私設の商船會社などに保護金を下附し置き、有事の日に、その船舶を借り上げて使用するなり、

五九 樺山中將膽略

山本 廉

西京丸、非軍艦、征清之役、假裝武器、以列戰鬪、樺山中將乘之、我

窠巢

夜上受降
城一開
唐李益

艦隊與清國北洋水師相遇、黃海初、認敵艦也、中將直取白色旗、附鐵丸、沈海底、曰、戰若不利、有死而已、無用此旗、其戰也、以出於列外、四面受敵、殆入死地、中將自坐號令塔、操縱極巧、開速射砲四門、各門放九十發、其間撮影戰況、四回、其綽々有餘裕、可想矣、既敵之巨彈、命中者四、大小砲痕、船體如蜂巢、且舵機既碎、中將下令、突敵艦、定遠鎮遠之間、其距離甚近、敵畏避開之、此時敵又發魚形水雷、射之、二回、不中、中將自舷、每伏瞰其命中、否云、嗚呼、西京丸、以一運舸、當宇內屈指、大甲鐵艦、中將之豪邁膽略、可想矣、

○孫思邈曰、智欲圓、而行欲方、膽欲大、而心欲小

六〇 征人の涙

徳富蘇峯

一劍國に報ゆるもの亦家郷を懷はざらむや、則ち家郷を

回樂峯前沙
似雪。受降城外月
如霜。不知何處吹
蘆管。一夜征人盡
望鄉。

懷ふも雖、一劍國に報ゆる志を妨げざるなり、松蔭吉田氏
嘗て唐詩を誦し、不知何處吹蘆管。一夜征人盡望鄉。に至り、罵
りて曰く、『是れ懦夫の情のみ、是れ怯者の心のみ』と、然
りも雖、恐らくは然らざるべし。

故郷にこよひばかりの命ごも

知らでや人の我を待つらむ

勇士豈涙なからむや、唯濺ぐべきに濺ぎ、忍ぶべきに忍ぶ
のみ。

六一 剛者亦泣

赤松蘭室

福島正則暴而好殺。近臣某者有小過。乃幽之城樓而不與食。有
一茶博憫其無罪、潛往餉之。某曰、主君若聞之、罪必及汝。且吾得
食、豈可免死。死固吾分。汝勿再來。茶博曰、吾嘗得罪、當死。因君救

之、以免。受恩不報、非人也。吾得罪、同死、無復遺憾。君不諒吾心、何
也。某大悅、每夜受餉、以得不飢。後數日、正則謂己飢死、往視之、
面貌依然、無憔悴色。正則怒曰、是必有竊餉者、誰爲之。我必訊鞫。
茶博進曰、餉者臣也。正則睨視叱曰、何以故。我且斬汝。茶博從容
曰、臣嘗得罪、賴某救之、得延命至今。臣銘之肺腑、肝久矣。今得罪、臣
寧忍坐視之乎。臣之死、晚矣。願與某賜死、幸甚。正則乃揮淚曰、汝
視死如歸、義氣動人。大可感賞。竟免某罪、復其位。世傳、正則暴厲
已。然其人勇烈、感義亦若此。宜哉。勇士之多、歸之也。

六二 本多氏絕命詞

大槻磐溪

中書忠勝病將死、召其二子忠政、忠朝、遺言後事。忠政就尊問曰、
大人苟所欲言、請謹聽之。忠勝曰、唯有一事、何也。曰、願不死耳。二
子怪問曰、人生有始、必有終。大人所悉、今何爲出此言耶。忠勝乃

大人小兒
大人君子
大人大人
鈴の屋大人

使忠政執筆以書其辭曰死止毛奈阿羅死止毛奈死止毛奈御恩遠受志君越思邊盤譯曰死可惜兮噫死可惜君恩海壑未全酬二子泣未答忠勝乃奄然而逝時年六十三

六三 義

丐

大槻磐溪

加州野田山爲前田氏累世之塋域藩之諸士亦多就其麓而葬焉每歲中元之夕家家供燈於墓前光明徹曉一夜惡漢數輩雜然來襲盡掠其蠟燭而去有丐者當徑而臥視之顰蹙曰凡此明燈皆是祈祖先冥福者何爲無情至于此惡漢等罵曰咄被薦奴敢咎人之爲丐者曰奴惟不爲公等所爲所以不免被薦苟爲其所不爲又何至被薦乎
寧靜子曰丐者不惟能知耻亦能嫻於辭令者

六四 揚震四知

曾先之

揚震嘗爲郡守屬邑令有懷金遺之者曰暮夜無知者震曰天知地知子知我知何謂無知令慚而退

六五 蘧伯玉

衛靈公與夫人夜坐聞車聲麟々至闕而止過闕復有聲公問夫人曰知此爲誰夫人曰此蘧伯玉也公曰何以知之夫人曰妾聞禮下公門式路馬所以廣敬也夫忠臣與孝子不爲昭々信節不爲冥々惰行蘧伯玉衛之賢大夫也仁而有智敬於事上此其人必不以闇昧廢禮是以知之公使人視之果伯玉也(小學)

六六 毀

譽

三浦梅園

毀譽は人の大節なり、世舉りて譽むるも必ず察すべし、人舉りて毀るも必ず察すべし、況一人はほめ一人はそしるをや、たごへば訟事あらむに、兩方理ありと思へばこそ、

互に、いひつものりて、やまざるなれ、これを奉行のさばかむに、ごにかく、一人は勝ち、一人は負くべし、勝ちたる人は、奉行をほめ、負けたる人は、そしるなり、又、あしき人なりとも、それにごもなふ人は、これをよしご思へばこそ、交はるなれ、わがよしご思ふをば譽め、わがあしご思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりて、その人の善悪も分ち難し、わなじ一盃の酒ながら、上戸は酔ひて、たもしろきものなりごいひ、下戸は酔ひて、苦しきものなりごいふ、まして、人傳なごにきかむごとは、覺束なきごとなり、

昔、人ありて、その子をおある寺へ遣し置きけるに、暫くありて、逃げ歸り、住持のここを毀りけるは、『我に月代剃れごいひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうのわきてあしごて、いたく叱られ、又ある時、わが厠に行きけるを見て、何故厠には

ゆきしぞ、不届なり、向後、厠に行くべからずごいひ、その後、朝飯たくごて、味噌をすりけるに、これも、味噌をするが聞ぬごて、理不盡の次第、殆、困窮にたよびたり、『ごて、語りけるを、親、聞きて、さりごは、出家にも似合はざる事なりごて、いそぎ山に登り、右の事ごも語りけるに、住持、聞きて、『いや、さやうのここにてはなし、常々髪よく剃る故に、この頃そらせけるに、いたく眠りて、これ見たまへ、かやうに切りこみ候ふ』ごて、きずをみせ、『そのうへ、厠も常の厠には行かず、奥なる隠所に行き、味噌も常の味噌をさしたき、客に使ふべきをつかひし故、これらの指南をこそ、かへすくもいたしつれ』ごいひけるにぞ、親も理に服しけるごぞ、
信濃の國、その原ごいふ所に、木あり、遠くより見れば、箒の形の如し、よりてこれを箒木ごいふ、されど、近づきて見れ

ば、箒に似たる所もなく、うち繁れりごかや、遠くより見聞
くご親しく見聞くごは、多くは、この箒木の類なるべし、凡
そ、人の物を批判するも、我好む所を譽むるものなり、俳士
に歌人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせむに、いか
でか公論あらむ、同じ道を、二人して行かむに、一人は健に
してこの道近しごいひ、一人は、疲れて、遠しごいはむ、これ
道に違あるにあらず、心に違あればなり、たごへば、義經の
事を論じて、義經をよしご思ふ人のいはむには、『この人、誠
に幼より常人にては、たはしまさず、共に天を戴かざる讎を
報ぜむご、夜々、院をいでて、劔をうち、遂に、秀衡が人ごなりを
見て、これにより、遂に、飛ぶ鳥も落ちむばかりなる勢の平家
を、二三年のうちに、攻め亡して、亡父の耻辱をすゝぎ、法皇の
宸襟をやすめ奉り、再、たねたる源氏を興し、兄頼朝を天下の

宸襟
叡慮

武將ご仰がしめたりごいひ、又、義經に不満の人は、『なるほ
ご、この人、戦争に、一ごほり、自由を得たる人ながら、平氏を亡
し、恣に、時忠の女を納れ、梶原景時ご詮なき口論、大將たらむ
人のしわざに似ず、腰越より追ひかへされしも、いはれなき
にあらず、しかるを都に逃れのぼり、頼朝追討の院宣を申
しうけ、芳野山にて、一人の静にわかかれかね、兒女子の涙をし
ぼられし』なごいふ、かく、よしご思ふ人の論ご、あしご思
ふ人の論ごは、まごこに雪ご炭ごの差あるなり、そのあし
きごころを捨て、よき所を取る、これ、人を用ふる道なり、
そのあしきをばあしごし、よきをばよしごす、これ公平の論
なり、また分々相應につきて、言ふ事あり、鼠を、はなはだ
大なりごいふも、牛の小さには及ばじ、蛇を、甚短しごいへ
ごも蚯蚓よりは長かるべし、故に、人をよしごいひて譽む

るも、あしこいひて毀るも、その場合を考ふべきことなり、
横井也 有

六七 蟬の引

三伏の日ざかりの暑さに堪へがたくて、

蟬あつし松きらばやごたもふまで、

ご口ずさみし日數も程なく立ちかはりて、やゝ秋風に其の
聲の衰へさびれ行くほご、さすがに哀にたもひかへして、
死にのこれ一つばかりは秋の蟬、

六八 貴と賤との損益

中井 覺庵

昔いやしく、今貴きあり、今を忘れ、昔をのみ語り出でて、人
を敬へば人、必ず、尊みて、いさをしを譽む、今賤しく、昔貴き
あり、今を顧みず、昔にのみ誇りがほすれば、人、必ず、笑ひて、
これを惡む、己ませば人へらし、己へらせば人ます、

取捨
用教
容

○袁了凡曰、予觀寒士將達、必有一段謙光、可掬。
○又曰、謗毀之來、皆磨煉玉成之地。我當歡然受賜、何怒之有。又
聞謗而不怒、雖讒焰燬天、如舉火焚空、竟當自息。聞謗而怒、雖
巧心力辯、如春蠶作繭、自取纏綿。怒不惟無益、且有害也。
○識量大則毀譽欣戚不足、以動其中。(讀書錄)

六九 自信

貝原 益軒

古昔の聖賢なほ、いまだ小人の誹りを免れず、況、今人、小人の
毀譽を以て、喜愠をなすべけむや、唯、内に省みて、疚しから
ざるを要するのみ、凡、世人の毀譽、その實に當らざるもの、
常に半に過ぐ、然れば則、自ら、修むるものは、妄りに、是れを
以て、欣戚をなすべからず、人を論ずるものも、遽に、是れを
以て、取捨をなすべからず、自ら、修むるもの、須かく、己が臧

否の有無を省察すべし、人を論ずるもの、須らく、詳に彼れの淑慝を考ふべし。

七〇 エヂソン

エヂソンは近代の有名なる發明者の一人なり、西曆一八四七年、北米合衆國のオハヨー州に生る、性質濃厚にして、また頗る意志の強き人なりしが、家計常に意の如くならず、學校にも通ふことすらかなはず、たゞ僅かに母によりて、讀書、算術の初歩を學びたるのみなりき、されど、頗る讀書を好み、雜誌、新聞など總て手許にあるものは悉く之を讀破せり、さるほごに、家運日に益々衰へゆきて、今は其の日の生活にも事を缺く程になりしかば、漸く十二歳の彼は自ら世に出て、生活の道を求めざるべからざることとなりぬ。

敏捷
鋭敏
同僚を凌ぐ
怒濤を凌ぐ

實驗
經驗

印刷
新刷

彼は先づ加奈陀鐵道の給仕となりぬ、その事務に忠實にして、然も敏捷なる、幾何くならずして疾くも他の熟練せる同僚を凌ぎ、長上の注意を惹きけり、彼はその業務の傍ら、暇ある時は書物を購ひ來りて、之を熟讀するを無上の樂としたりしが、或時ふと化學書を求め來りぬ、さて、例の如く熱心にこれを讀み始めたりき、されど、その學理は容易に解し得ざりしが、書中の注意に従ひて、實驗に由りて之を研究せむと決心せり、それより種々の困難を犯して、怪しげなる實驗室を車中に設け、汽車の進行中其所に閉ぢ籠りて、熱心に實驗をつゞけぬ、後年彼がかの發明の偉業を大成せし學力は、實に、此間に養はれたるものなりとぞ、生れながら企圖の才を具へ、且萬能の智識を具へたる如き彼は、そこに又、一の新計畫をなし、古き活字と印刷器械とを

求め來りて、一小新聞を發行したり。彼は自ら記者たり、植字職工たり、印刷工たり、更にその販賣者たりしなり、即ち、その新聞を乗客に賣り、其收入を以て實驗室の整頓を計らむごとくなり、されど不遇なるかな、或日燐の入りたる壇ふご棚より落ちて發火し、荷物に燃ゆ移りしかば、彼が多年の苦心に成れる實驗室は之が爲に全く打ち壊されて、その形を止めざりき。

ある小春日和の暖き日に、不圖愛らしき一人の幼童の、鐵道線路に上りて戯れ居るを見たり、危険なりと思ふまもあらせず、彼方より轟々たる音凄じく列車進み來り、その間僅に數間に過ぎず、かくと見るや、エヂソンは奮然身を躍らして線路に跳び入り、幼童を抱き上げぬ、實に間髪を容れず、エヂソンの肩を擦りて過ぎぬ、幼童は其驛の驛長が愛

兒なりけり、驛長の喜譬ふるに物なく、彼はエヂソンを抜擢して、一躍通信員となしぬ、エヂソンの志業はこゝに始めて其緒に就きぬ、彼は通信の職にありて、電氣電信の學理を研究し、遂に種々の發明を成し遂げぬ、

この頃より、エヂソンの名漸く高く、彼は聽てニューヨークの附近に一大實驗室を設立するここを得、種々の發明を大成したりき、就中電燈の發明はその最も著明なるものにして、彼の名聲は之に依りて全世界に響き渡りぬ、

七一 飯田覺兵衛

大槻磐溪

加藤忠廣、清正子也。嘗語左右曰、我願爲多力人。左右曰、何也。曰、欲重襲厚甲、以免銃丸之害耳。飯田覺兵衛、侯之舊將、而數從清正有功者。此時在坐、進而泣曰、主君何言之怯耶。夫先君之在世、

破堅挫銳大小數十戰未嘗一受刀癍遂爲征韓先鋒蹂躪八道鬼上官之名至今猶止兒啼然而所著不過一單甲抑爲主將者苟能愛將校撫士卒則三軍之從指揮猶吾手足然則三軍之甲皆君之甲也假令將叛卒離君獨雖重百甲亦無補於死君何言之怯耶遂號哭而退獨自歎曰噫加藤氏之亡其不遠矣居無何忠廣果坐事國除

七二 一生四十八戰

大槻磐溪

照祖畢生之戰蓋四十八度其每臨陣據鞍指揮進退士卒不借一步及戰急也手不復秉麾直以空拳叩前鞍連呼曰進々血淋漓且不顧也故右手四指中節頑固皆生腫及老屈伸甚難云公語人曰鎧冑之爲物無用於美麗而又不便於厚重并伊兵部多力而擐重甲然被傷者數輩矣本多中書則反之而未嘗一受

刀癍由此觀之大抵輕便而利於戰爲可耳其不尙虛飾而留心實用者率此類也

七三 需要と供給

藤岡作太郎

ある魚商得意先をかけ廻りて大方擔ひし魚を賣り終へしが只一尾の鯛残り如何にもして日の暮れぬ中に賣らむと思へども到る處に斷られて鯛は益ふるくなるのみなれば遂に損失をも顧みず半分の價に減じ辛うじて其日の荷を下しぬ

街を賣り行く魚賣の聲今日は昨日に變りて甚だ勇まし、海も凩ぎて大漁なりしなるべし價を問へば先日のしけには一圓にても買ひ難かりし鱈の今日は三十錢なり『明日は同じ日和にても肴の價は倍に騰るべし隣の町の祭禮な

不漁

日和

れば價に拘らず飛ぶが如くに賣れ行かむこと受合なり、廉
き肴を得むと思はば今日のうちに買はれよ』と魚賣の勸
む。
いかなる物品にても、之を需むるもの少なければその價低
く多ければ高し、人の世にあるもまたこの理に戻らず、卓
越の器も時に要なきは重ぜられず、才氣は劣りても爲す所、
世の需むる所と相合へばその成功驚くべきものあるべし、
名利は人生の目的にあらず、事業の成敗によりて人物の優
劣を測るべからず、いへども、時に遇はずとて漫に不平を
鳴らすは不可なり。
また大切なる物も量多ければ貴からず、空氣は人間の一刻
も缺くべからざる物なれども、到る處にあれば、常は價ある
ものとも思はれず、されど水底深く潜水器の中に運ばるる

に及びては一升の空氣も少からざる價あり、片山里に住む
人の水に價ありとは信ぜざるに、水道を設けて飲料水を引
く都會にてはその使用に代價を拂はざるべからず、土はも
と價なく物の極めて廉きを『價土の如し』とさへいへども、
大都會の中央にては金錢に代へて盆栽の土を得べし、欲す
るままに得べきものは價なし、價は供給を制限せらるるに
至りて、始めて生ずるものなり。
されば商品の市場に出づること多きときはその價低く、多
くともこれを需むるもの更に多くば、その價高し、一幅の書
畫にて數千金の價のものあり、又大火後の木材の價は平常
の二倍にも三倍にも騰るべし、これを『物價は需要供給の
關係によりて、定まる』といふ。
金の貴きは産出の少なきが爲にして、金剛石の愈々貴きは

模範
鑑

愈々稀なればなり、鐵は有益なれども、供給至つて多ければ世人は之を貴しとせず、吾等の世に立つや、金の如くせむか、また鐵の如くせむか、金も仰ぐべからず、鐵も卑むべからず、かれらが各々その性を盡して、變らざるを模範とすべきなり。

七四 山本勘助の明眼

齋藤彦麿

軍旅
團

山本勘助は、素姓賤しく、五體不具なれど、系圖正しき剛勇の士には、遙に優れり、或時、甲斐の諸士を集めて、軍旅の物語する席に、童兒三人交れり、小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市なり、助太郎は談中静まりて、よく聞き居たり、八彌は笑ひて居たり、友市は退屈して度々座を立ちたり、勘助此三兒をつくくこみて、助太郎は赤心動かぬ大丈夫

にて、八彌は心定まらず、友市は不忠の名を遺すべし』といひしに、果して助太郎は後に小宮山内膳といひ、故ありて甲州を浪人しつれども、勝頼天目山にて生害の頃、態々馳せ歸りて、死を共にし、義を立てたり、八彌は後に、小山田八左衛門と名のり、勝頼生害の頃、善光寺へ逃げ行きしなり、友市は、後に、秋山内記といひ、又、攝津守に、任ぜられたるが、勝頼生害の五日以前に、甲州を出奔し、敵將、織田信忠に降参しつれども、不忠の逆賊なりとて、縛首うたれたり、勘助は一眼ながら能く見抜きたり、

七五 禮儀

穂積陳重

わが國の進歩と、歐米諸國の進歩との差違は、いづこにあるか、この問題につきて、余は、嘗て例を、衣服、住居、生活、美術、音

樂等の上に取りて、その差違はこれを約言すれば、内外の二字に歸すといふことを述べたりき。こゝには、更に、例を、禮儀と道德との上に取りて、この區別を説明せむとす、わが國にては、内の禮儀、まことに、よく發達せり、試に、これをいはむか、その人を訪問するや、まづ寒暖の挨拶を述べ、互に、頭を下げ、互に、席を譲り、再三、再四、辭讓して後、さて、はじめて、椅子に倚り、或は、座蒲團を敷く、しかも、その坐作進退には、小笠原流、何流などいふ式ありて、一々、嚴格なる法度を守らざるべからず、ここに、茶の湯などに至りては、その内の禮儀の發達せること、まことに驚くべきほごなり、さて、さらば、外の禮儀は、いかにいふに、こは、殆ど、何の禮儀もなしといふも可なるほごなり、試に、かの葬式の折會葬せる者の、讀經、弔詞などの終りて、今や、焼香し、或は、玉串を捧げむ

とする際に見よ、平生、小笠原流の式を守り、茶の湯の作法を奉じて、内にありては、うるはしき禮儀を行へる人々の、今、この最も靜肅を要し、最も悲痛の情を表すべき時に當りて、何事ぞ、互に押しあひ、突き除けて、あわたしげに、袖を抛げ、香を投じて、さて、逃げ歸るが如き行をなすにあらずや、去つて、これを、歐米諸國に見よ、國々によりて、そこに、多少の相違あれど、すべて、皆、その禮儀に、一定の法式あり、例へば、道路を行くにしても、その禮儀は、至つて正しきが如し、前方より、人來れば、われ必ず、右に避く、又、人と連れ立ちて行くに、その人、わが先輩か、もしくは、年長者なれば、必ず、その人を、右の方に据ゑて歩む、かの、紐育、倫敦などの市中の如く、雨天の日にも、傘をさしては、歩行すること能はざるばかりなる、いはゆる、肩摩、鞞擊の境にありて、その街上に、數千人

の相往來するを見よ、右側を行くものと、左側を行くものと、整然として相分れ、そこに、些の混雜なく、そこに、些の喧嘩を見ず、この一例を推して、以て萬事を想ふべきにあらずや。

余嘗て、かの國にありて、劇場に行けることありき、いづこも同じ習にて、最も場代の安くして、しかも、よき場所へ入らむとするには、早く行きて、開場の時の來らむを待たざるべからず、かくの如くして、余は、その戸の前に立ちつゝありしに、後より來れるもの、順次、余の後に立ちて、往來の人の邪魔にならぬやうに、長き列をなして、さて、靜に戸の開くを待つなりき、かくて、いよく、戸の開く時となれるにも、し、わが國なれば、こゝに、われ勝ちに、鯨波を作りて、切符の賣り場に、押し込むなれど、そこには、少しも、さる喧囂なく、各、その順

序を守りて、靜に、次を追うて、場に入れり、劇場にて、最も安き場代の所に入らむものは、いふまでもなく、皆、下等の賤民なり、しかも、その禮節あること、かくの如し、また、學校にて、教師が、生徒に札を渡すを見たることありき、その時、生徒は、一人づゝ、出でては、札を受け取り、餘の生徒は、みな、右の手を、隣の生徒の肩に掛けて、列をなして、靜に並び居たりき、まことに、公の秩序を守り、行儀を好くすといふ風習は、下等社會、小兒等の上にも、發達し居ること、かくの如し、英國人は、容易にその帽子をぬがざる風あり、されど、行き合へる時、もし、すこしにても、肩などの、觸るゝことあれば、アイ、ベック、ユーア、パーズン」といひて、首を下げて、丁寧な挨拶をなすなり、英國の刑法によれば、毆打といふは、決して、打擲をのみ指すにあらず、たごひ、指一本なりとも、他に著くれば、

直に毆打となるなり、乃ち英國人が指一本をも決して、他に著けざることを知るべきにあらずや、いやしくも人間が、公の生活をなして、多數の人と交際を圓滿にせむとせば、公の禮儀なるものをして、そのまことの發達をなさしむるにあらざれば、到底能はざることなり、古の聖人の禮といふものを教へたるは、まことに禮儀なければ、交際の成立せざることを見たればなり、わが國人たるもの、よくこの理をわきまへて、つこめて、公の禮儀を發達せしめむことを、はからざるべからず、

七六 近江聖人

原 念 齋

某州一士人、經過藤樹之故里、欲弔其墳墓、問路農夫、農夫即舍耒耜、徑趨入家、更著潔服、出士、跟之行、既而至墓所、農夫拜掃甚

恭、士心訝之、因問曰、「爾于藤樹有何親故、而敬禮乃爾。」農夫曰、「欽仰藤樹先生、豈惟余哉。闔邑皆然。父老每語其子弟曰、「吾里父子有禮、兄弟有恩、室無忿疾之聲、面有和煦之色者、職由藤樹先生之遺教也。」此所以無一人不戴其恩也。」於是士變容曰、「世稱爲近江聖人、吾乃今而知其非虛讚也。」即敬拜其墓、厚謝農夫去。

七七 君子有五樂

佐久間象山

君子有五樂、而富貴不與焉。一門知禮義、骨肉無罅隙、一樂也。取予不苟、廉潔自養、內不愧於妻孥、外不忤於衆民、二樂也。講明聖學、心識大道、隨時安義、處險如夷、三樂也。生乎西人、啓理窟之後、而知古聖賢所未嘗識之理、四樂也。東洋道德、西洋藝術、精粗不遺、表裏兼該、因以澤民物、報國恩、五樂也。

七八 繪を見て心を改む

那珂梧樓

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき、その人二十年ばかりの昔、陸奥に來りて、物語せし事ありしを、今たもひ出でたれば、書き綴りて人々に見せまらせむ。

茂足曰く、『我れ少き時、東海道より、京に登るに、近江の石部と、水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と、彫りし碑あるを見たりしかば、その跡のゆかしさに、尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、そこに、卿の念じ給へりといふ觀音を安置せり。』

その御佛の御前に、旅商人と覺しき、五十餘歳の男、何事を嘆くにか、さめく、と泣き居たり。うちつけに、その故を問ふべくもあらねば、立ち去りて、本の驛路に出でぬ。頃しも、二月の初めなりければ、日影あたゝかなるころ、見出でて、憩ひ居たるに、かの男も出で來りぬ。我は、『日影も暖なり、ちと休み給はずや』といふに、かの男、會釋して、たなじ所に、腰うちかけたり。暫し四方山の物語して、さて後に、『さきには、觀音寺にて、見かけまらせしが、かの卿には、深き御由縁なごたはしませるにや』と問ひけるに、はちらひたる氣色にて、『さては、世に似ぬ嘆きせしを見給ひけむ。賤しき身のいかで、やむごこなき御方に、由縁なごいふことの候ふべき、但し、今日しも、不圖、思ひ出でし事ありて、涙のせきあへざりけるを、はづかしくも、怪まれ候ひけむ。『懺悔には、罪を滅す』と承れば、若き時の罪ほろぼしに、道すがら、語り聞ゆむ』とて、もろ共に立ち出でぬ。かの男の曰く、『我は、津の國大

阪の者にて、稚かりし時に、父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に、奉公してありけるが、その家の子は、遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬさまなりしかば、父は、怒りて、勘當しければ、母、刀自は、一人の男子ゆゑ、さすがに、いさほしがりき、上總の東金に、出店あれば、竊に、そこ守る人に、頼みきこぬむさは、思ひよりしかど、遙々の旅路を、獨遣らむも、心もこなく、我を、召し出で、「おこは、兩親共に、世にまさねば、何處に住むとも、心安からむ。」後には、必ず、家分けて、得さすべし、暫しが程、わが子に具して、上總の方へ行かずや』と、金二十兩預けられて、その子と共に、大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身の、なほ、過を悔いもせず、夜毎に、酒色を廢めざれば、中山道の、蕨驛に、來りし頃は、その金も、残りすくなになりけり。

明日は、江戸より船出せば、東金に渡らむ事も、難からじなご、聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝる、たのもしげなき人に具して、出店に行きたらむには、假令、母、刀自の書ありさて、同じむれの、ゆせ者さや思はれむ、よし、さは思はれずとも、この人の心改らぬほごは、大阪にも歸らるまじ、こにもかくにも、よしなき人に伴ひて、遙にも來りけりご、くやしき限なかりしが、又、思ふやう、よすが求めて、身を立てむには、江戸にまさる所やはある、こゝまで來しこそ幸なれ、今宵のうちに、この人を棄て、奔らばやご、思ひよりしかごも、暫しの程も、貯なきをいかはせむ、かくご知りなば、預りし金あるうちに、ごにもかくにも、すべかりしを、後れにけりご、又、更に、悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より百兩餘のつひねもて、つくりたるものなるこそを思ひ

出でて、よし／＼、こを盗みて、賣代さなきむには、十日二十日の日を送るに、難き事は、よも、あらじと、心一つに謀りすまして、さらぬさまに、もてなし、今宵かぎりの旅寝なれば、なご、いひ拵へて、酒勸めて寝させぬ、

夜ふけて後に、そこ、起き出で、枕邊に忍びよりて、窺へば、建て廻したる屏風の内に、鼾の聲のみ、聞ゆたり、時こそよけれと、徐に、屏風に手を懸けて、引きあくるに、内より、行燈の火影の、ささ、さし出でて、後の襖障子に、映りたるを、人や來ると、驚きて、顧みれば、今までは、見も入れざりしその襖に、藤房卿の笠置より、後醍醐天皇の御供して、大和の方に、落ち給ふ時、松蔭に袖しきて、その上に、帝を寝ねさせ奉りし形かたをなむ畫きたりける、我は、これを見て、あなあさまし、やむごさなき御方だに、君の御ためには、かゝるならば、ぬうきめをもし給ふ

ものを、いかなれば、われは、主の物盗まむごまで、思ひなりにけむと、くやしくも口をしくて、寝ねたる人の枕邊に額づき、くりかへしつゝ、その過をうちわびたりき、

かくて、東金に至りて後も、憂き事あれば、この夜の事を思ひ出でて、六年、七年、過ぎたりしに、その人も心改まり、家に歸りて、父の跡を継ぎしが、われも、約束のごとく、家わかたれたり、それより、次第に富み榮ゆ、今は、家業をば、子に任せて、あかぬ事なき身となりたれど、さてのみ居らむも、うしろめたさに、をり／＼は、こゝらあたりまで、物あきなひに、まゐるなり、されば、いつごとも、この御寺には、詣でぬれど、今日しも、不圖、思ひ出づれば、年こそあまた過ぎにたれ、かの脇差盗まむご思ひよりし、その月のその日なりければ、もし、そのをりしも、この卿の御姿を見まゐらせずば、いかで、かく、事なくて、世に

はあり經へきこ、かたじけなきに、涙の散り落ちて、君にも怪まれ候ひぬ、われは、賤しき生れながら、わかき時より、軍物語の書讀む事を好める故、その時しも、この卿の事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ、よりて、子供等にも物讀むことは常に、厳しく掟てはへり』と語りぬこそ、茂足は、その頃、四十歳ばかりの人なりき、

七九 心有主

元、許魯齋嘗暑中過河南渴甚道有梨衆爭取啖之魯齋獨危座樹下不顧或問之曰非其有而取之不可也或曰世亂梨無主曰梨無主吾心獨無主乎(劉氏人譜)

八〇 生涯の終らせよ

北獨逸のある町に、ひそりの商人住みけり、名をミユルレ

ルといふ、彼は、近頃、途上にて、しばく、立派なる、若き紳士の丁寧にて、會釋しつゝ、過ぎ行くに逢へり、もこより、一面の識もなきものなれば、ミユルレルは、いぶかしきことと思へども、ただ先方より會釋せらるゝまゝ、われも、また、丁寧に、答禮してありけり、

ある日、ミユルレルは、ある友人の招待を受けて、その家に行きぬ、導かるゝまゝに、客間に入れば、そこには、既に一人の客ありて、主人たる友さ、さも、樂しげに、話し居たり、ふこ、見やれば、さても不思議や、その人は、彼の若き紳士なりけり、友は、ミユルレルの入り來れるを見て、つご、立ちて、これを迎へ、さて、若き紳士に向ひて、ミユルレルを紹介せむさせり、若き紳士は、この時、立ち上りて、丁寧に、ミユルレルに會釋しつゝ、主人に向ひて、『紹介せられむ要あらず、われは、この

御方ごは、多年の知己なるを』といふ。ミユルレルは、ごご思ひければ、ごごばを改めて『君はさだめて誤解をなし給ひてやたはさむ。われは、まごごに幾度か、君の丁寧なる會釋を受け参らせぬ。されど、われは、全く、君を知らざるなり』といへり、『されど、われは、君を忘るゝごご能はず』ご、若き紳士は答へて、さて、ごごばをつぎ『われは、けふ、ごごに、親しく、君の恩を謝し参らする期に、逢ひしを喜ぶ』ご、さも、ゆかしげにいふ、『何をもて、われに恩ありごは、いはるゝぞ』ご、ミユルレルは、なほもいぶかしげにいへば『そは、まごごに、ひご昔のごごなり。されど、われには終生、忘れぬごごなり。いで、そのあらましを語り申さむ。しばしの間、われに許したまへや』さて、若き紳士は、語り出でぬ。『指を屈すれば、はや、十何年の昔ごごなりぬ。たのれのまだ

小學校に通へる頃のごごなりき。ある日の朝、常の如く、學校に行きぬ。その途上には、いつも、八百物市場の開かるゝ所ありて、その朝も、にぎはしげに、人々の商ふさま、先づ、わが眼に入りたり。知らるゝごごく、かしこの市場にて、最も、にぎはふは、菓物店なり。時は、まさに、秋の末なりければ、さまざまの菓實の水したゝらむばかりに、實りたるが、籠子の中に盛られたる、いかに、うつくしきながめにかありけむ。ごごに、わが心を引きしは、林檎の實の、赤く色づきたるが、皮を通して、漏るゝにほひの、まごごに、ぬならぬそれなりけり。子供心の、何ごはなしに、立ちごごまりて、たのれは、しばし、うちながめて居たりけるが、その店主は、今や、隣なる婦人ご物語しつゝ、その背を店の方へ向けたり。あゝ、今思ひ出すだに、たそろしき心地せられて、たへがたし。されど、神よ、許さ

せ給へ。そはまことに、一時の出来心なりき。さても、いかなる悪心なりしか。かゝる多くの林檎の中より、たゞ一ツ二ツ取りたりとて、店主の氣付かむやうはあらじと、ふと、たぞましき心、浮びぬ。かくて、あたりを見廻しつゝ、靜に、そのそば近く寄りぬ。そこ、その一つを取りて、いそぎわが袂に入れむとせり。あゝ、その瞬間なりき。たのれは、耳のあたりに、はげしき打撃を受けぬ。驚きて、林檎を取り落しつゝ、ふり向けば、一人の男の立ちたりけるが、たのれを見たるしつゝ、『少年よ、何とて、かゝる悪心をば、起しつる。ゆめ、ふたゝび、かゝる悪心を起すことなかれ。われは、汝のこの悪心をば、けふ生涯の終りさせむことを望む』と、いひぬ。たのれろしき、はづかしさ、一時にせめて、たのれはいひがたき心地にまごひぬ。さても、その人の聲のゆかしさ、心の底まで、し

みごほるばかりなりき。そのやさしげなる顔、今に忘れず。きのふまでは、さまで、心を引かざりし學校の教も、これよりは、一々、心に刻まるゝやう、覺ゆて『生涯の終らせよ』この一語は、常に、新らしき記憶を起さしめぬ。その後たのれは、ブレーマンに行きて、商業學校に入りぬ。業卒へて後、ある商館に入りて、南亞米利加に航し、かゝるこにて、長く、貿易の業を営みたり。君等も知らるゝ如く、かゝるこの貿易ほど、不規則なるは、あらじ。人を欺き、商品を偽りて、たゞ營利をのみ心掛けむは、その地の貿易商の常にして、さる方に、巧なるをば、あつばれ、うでよき人よと、われも、人もいふが常なり。ここに、取引先は、何のゆかりとて、もなき外國人のみなれば、得らるゝだけの利益を得て、本國に持ち歸らむこと、こよなき國益ならずや。なご、人々いひあへり。あはれ、たのれも、この

間に交りて、年少氣銳の、さなきだに、功名富貴の念つよき折なり、多少の不正は、顧みるべきここにあらずなご、思ひひがめて、あやしき手段を、心中に浮べしこと、そも幾度なるかを知らず、さても、ありがたきは、彼の恩人のことばなり、その度ごとに、その折ごとに、心の底より湧き出づるは、『生涯の終させよ』この一語なりき、かくて、この訓戒は、遂に、たのれをして、六年の長き間、未だ、嘗て、一たびも、不正のことに、指を染めしめざりき、たのれのありし商館の信用の、かくて、今に變らぬも、全く、これが爲なり、たのれは、かしこにて、實に、莫大なる利益を得たりき、その齎し歸りし金額は、いかに多額なりしぞ、かくて、たのれは、こゝに、いご、ゆたかなる生活を送れり、されど君等よ、たのれの自負するここを許させ給へ、わが齎し歸りし金銀の

中、たごひ、一厘のそれなりとも、いさゝかの不正を意味するものはあらず、神よ、願くば、長へに、わが恩人を恵み給へ』かく、かたり終つて、紳士は、つご、立ちて、ミユルレルのそばに寄り、跪きて、その手を取れり、涙をやごしたる眼に、見上げつゝ、『わが恩人よ、君も、今は、わが心からの謝辭を受け給ふなるべし』ご、強き聲にていひぬ、こゝちよげに、見わろしたるミユルレルの眼にも、涙ありき、感に打たれたる主人の眼にも、(オルデンブルク國民雜誌)

八一 梶川彌三郎

大槻磐溪

信長之攻槇島也、暴雨連日、宇治川大溢、殆不可濟。信長立馬水涯、呼曰、誰先渡此川者、古梶原、佐々木豈鬼神乎。言未畢、有一騎自上游亂流而渡。信長揚策曰、夫、夫非他人、必梶川彌三郎也。勿